

# 尾崎喜八資料

## 第 7 号

特集1 写真家としての尾崎喜八

特集2 尾崎喜八と宮沢賢治

思ふこと／尾崎喜八 ————— 2

尾崎喜八への旅 その一／伊藤海彦 ————— 3

研究と資料 ————— 6

尾崎喜八先生と校歌／名取正義

\*

資料1 生態写真家としての尾崎喜八 ————— 12

日本生態写真研究会／秋の詩趣／山を歩いて草花を写す

アルス文化叢書『雲』緒言／珍しい雲

\*

資料2 尾崎喜八と宮沢賢治 ————— 20

雲の中で刈った草(宮沢賢治追悼)／賢治を憶う

NHK教育テレビ現代国語「承認の朝」

\*

尾崎喜八書誌—初出目録・補遺(二)／嘉納忠明 ————— 29

新聞・雑誌掲載目録 補遺／他者解説・案内類

雲とクラドニ图形／石黒敦彦 ————— 29

\*

尾崎喜八記念館計画の進行状況について(二) ————— 30

研究会だより／尾崎栄子 ————— 31

この一年の出来事／編集室から ————— 32

\*

表紙題字／草野心平

尾崎喜八研究会

1991年2月

## 思ふこと

敬虔と誇りとの額に朝々の太陽をおくりながら  
薔薇いろからうすみどりの世界へと

季節はあやまりもなく私を導いて來た

小供のやうに、眼を大きくあけ  
できるだけ大股に、しつかり

生活の歩調を彼とあはせ

眼前に千の華麗と驚異とを映じいだす日々のうつり

かはりをよぎりて

けふこそ實に、六月の

かくもはかり知られず言葉にあまる

朝、晝、夕の幅びるな光と暗とを身に浴びる

みどりの枝や、眞紅の花

夏雲の湧きたつ蒼穹と雜草の蔭を流れる豊麗な小川

ある時はその枝々に希望をかけ

その花びらの炎の上に突磯の熱情の唇を押しつけ

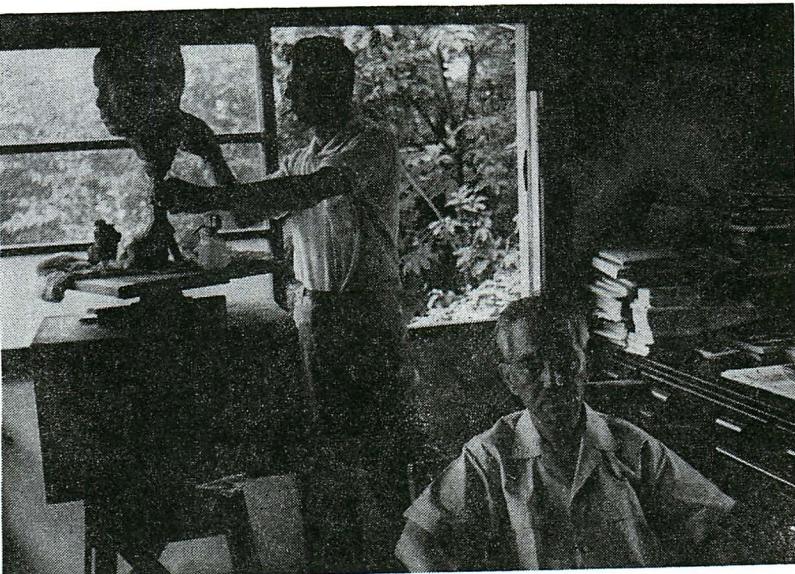
また彼等の高き動亂と共に憤り

彼等の清きつめたさに涙をおとす

おゝ、一切自然の象徴に我れとわがすべてを見て  
悦び、熱し、憤り、泣き

かくて季節の大きいなる明暗の海に生きながら  
いつかは人の世の歩みの最後の荒野に

永劫の星とおのれとを見わけがたくする私であるか！



『モテルの午後』三室修・撮影（一九五九年  
八月、彫刻家は西 常雄氏）

# 尾崎喜八への旅

## その一

伊藤海彦

詩人尾崎喜八について、私はその没後長短とりまぜ十数回文章を書き、また講演や講座といった形で作品や人間についての話をした。しかし、そのどの場合にも書き残したこと、言い残したことがいつもつきまとっていた。もちろん、一人の人間について語りつくすなどということはあり得ないのだが、尾崎喜八の場合、その解きあかせなかつた部分が年を追うにつれて大きくなっていくような気がする。詩人は死者となつたときからそこに止つているといふのに、まるでその後もなお詩人が生きて創作活動をつづけているように、私の中でその存在が大きく重いものになつた。だからこそ私はなんとかその距離を少しでも縮めようと機会を与えるたびに書いたり話したりしてきただのである。

いま、この「尾崎喜八資料」の紙面を与えられたので、これまであちこちに書いたことと重複するかもしれないが改めて「私の」詩人、尾崎喜八についてまとめて書いてみようと思う。私は論理的人間ではないので多分に情緒的になるだろうし、相変らずどことなく舌足らずの感に終るかもしれないが、それを恐れず書くことにする。

まず初めに、これはちょっと驚かれるむぎもあるかと思うが、私は十代の頃必ずしもこの詩人のいい読者ではなかつたということをいつておかねばならない。早熟で文学幼年(?)、文学少年でもあつた私が文章ではなく詩というものの魅力にとりつかれたのは十六

歳頃だったと思う。たいがいこういうとき、最初に惹きつけられた相手……といふ魔法のような力でひきずりこむ詩人とか詩集とかがあるものだが、困つたことに讐讀の私はその最初の衝撃を与えたのが誰だつたのか非常にあやふやなのである。当時は文語の調子のよさにすっかり酔つていたし、一方では童謡を書きだしたりして、から白秋が大きな位置を占めていたような気がする。その後犀星、朔太郎、拓次……と魅了される詩人は数多く、なかつた。「四季」の影響にしても三好達治の、それも今にして思えば文語的な技巧と口のあたりまでは文語詩の誘惑からなれられたりかえしていたに過ぎなかつた。同じ「四季」の血縁にある道造や、やや特異な中也の本質的なものにふれるのはもう少しあとであつた。

ところで尾崎喜八は……というと、もちろんその名前はすでに著名であつたから知つてはいたが、その頃の私が読んでいたものは「雲と草原」の普及版のほかは「ブンデルング」(ヘッセ)、「北方の歌」「阿蘭陀組曲」(デュアメル)などの翻訳もので、詩集としては「高原詩抄」と、後になつて詩人自身が(思慮の浅さ)と深く恥じなければならなくなつた「此の糧」だけだつた。幼年時を信州で過したこともあつて、その後東京で育つても私は自然に対する志向が強く、足も強かつたので高原を歩くことは好きだつた。だから

「雲と草原」や「ブンデルング」や「高原詩抄」を需めたのだろう。しかし、いわゆる山登りをまったくといっていいほどしない私にとって、山岳愛好家、登山者たちの憧れの的だった「山の詩人尾崎喜八」は存在しなかった。

私が初めてこの詩人と会ったのは昭和二十一年の秋である。私が満二十一歳。詩人が五十四歳。場所は信州富士見、詩人自身が散文でも、また富士見高原詩集の自註でもくりかえし書いているように戦後の混乱の中を家を失つて転々としたあげくたどりついた土地である。

ここでまた少し横道にそれるようだが、私の側のことを書いておかねばならない。

当時私はまだ学校に籍を残していたのだが終戦とその直後はまことにいかげんなもので、学校はあつてなきが如き状態だった。私の両親は昭和十九年、「疎開」という今の若者たちには理解し難い言葉が誕生してすぐ十年余住んでいた上落合の家をひきはらって上諏訪に移った。父方の祖母は宮川の生まれ、父も生まれは松本だから親類縁者の多い信州を疎開先にえらんだのは当然だろう。父は大正十四年の暮から昭和六年にかけて病氣療養のため一時諏訪湖畔に住み、郷土劇運動に力をいれていたが、その時期一歳から六歳だった私にとってこの土地はほとんど郷里といつてよかつた。父が借りた家は大手町の並木通りの突き当たりの置屋で、戦争末期の営業不振のせいで借りられたのだろう。そうでもなけ

ればこんな花柳街の一角に住むなどということはまず考えられぬことで、これも時代のふしきな面白さかもしれない。

ところで戦局のけわしくなり始めた頃から、文士たちの生活は誰しも苦しくなつていた。

私の父などは昭和の初め頃からは専門であるべき芝居ももっぱら商業演劇となり、それ以外は子供から大人までの通俗大衆小説を（それも商売専一に時局に迎合して）書いていたのだが、それでも仕事はへる一方、まして疎開してからの日々はほとんど仕事はなかつたという状態だった。だからたまに地元の青年たちの演劇の指導とか講演めいたものを依頼されるのは大変ありがたいことだった。

これは富士見にやつとのことでたどりついた尾崎喜八にしても同じことで、やはり青年達に話をし出かけいくばくかの御礼をうけて凍みた夜道を帰つてくる描写がその散文に出てくる。

そうした父の講演のひとつが私を詩人尾崎喜八にむすびつけてくれたのだから、父を呼んでその話をきこうなどといつてくれた農場の人たちに私は大いに感謝しなくてはならぬ。そして、講演に出かけた先の農場に南方で病いを得た石黒さん夫妻がいたということもふしきな縁というものかもしれない。療養中の夫をたすけていた若妻が詩人の娘栄子さんで、父はそこで尾崎喜八が富士見にきていることを知ったのである。栄子さんとの話がどういうものだったのか、今もってあまりくわしいことは知らない。十代の終り頃、

私が文学の方へ傾いて行くことをきらつていた父と私は何かといふと対立していたが、疎開したそのあとからあきらめの気分もあつたのか私を認めてくれるようになった。いつた

詩を書いているなどといわでもの所で喋つた父は帰つてくるなり私にそのことを告げたのだった。

それからあとの記憶が情ないことに少しあやふやで、第一最初に訪れた日を正確に覚えていない。恐らくいきなり訪問するはずもないから、詩人宛に手紙を出したのではないからと思うがそこらあたりもはつきりしていない。ともかくそんな運命の糸のような導きでようやく大人になりかけた私は富士見の分水荘に出かけていったのである。

ひろびろと枯れた空の下で

白樺や楓の葉がたえまなく散つている。

一枚一枚が太陽に祝別され、

昔の色の空の青に

これを最後と染められながら。

ああ 没落の空間に幾変転して

その転身によこたわる秋の木の葉の美しさ。  
（「落葉」から）

詩人がこう歌つている林の中に、踏み跡で

自然につけられた小道が吸いこまれるようにつづいていた。それを道なりにやや左へまがつて行くと、木々の間に分水荘がみえた。いくぶんおずおずとしながら近づくと、折から背をむけて水仕事をしていた婦人が人の気配にふりむいた。そして、むこうからにこやかに笑いながら声をかけてきた。そのときほつとしたのを今でもはつきり覚えている。それが実子夫人だった。

その最初のときのものではないと思うが、ほぼその頃のものといっていい写真が二葉残っている。一枚はその林を背にした私の写真で、丸坊主の私は教練服の名残りのようなものを着て立っている。もう一枚は分水荘の縁先で詩人と二人の写真である。この方は残念なことにいささか焦点がぼけているが、詩人のやつれている顔とそれにもかかわらず、きつとこちらを見すえている強いまなざしがよくわかる。その顔のやつれは富士見にたどりつまでの幾変転のせいだったのだろうが、

当時はだれしもがやせこけていたから、私はそれを異常だとは感じなかつた。それよりこの詩人に会つてまず私が惹きつけられたのは眼の表情だった。きびしく何ものもゆるがせにはしないぞといった強さと、微妙にいりまじる無限の優しさであった。(のちに私はそれが東京下町の、怖いがものわかりのいい典型的な叔父さんの眼だということが判るのだが……)

その最初の詩人と時間とを克明に記しておけばよかつたと今になつて悔んでいるが、そ

の頃日記を中断していたためにいつたい何を話したのか、当時の若い私がどういう第一印象をもつたのかがさっぱり判らない。ただ、その頃私は私なりに詩の上で大きな転機にあつた。それまでの文語の、やや言葉を遊んでいるようなものからぬけだし、口語でのまつたくちがつた領域へと行きかけたときだった。若い者の常で、賢治や光太郎の洗礼をうけたかと思うと中也の一寸世をすねたような歌にも影響され、それはたえずふらふらとはなはだ頼りないものではあつたが。そして一方ではリルケにかぶれていたから…たぶんそれらのことを若氣のいたりであれこれと喋つたのだろう。

…それから上諏訪から富士見へと距離の近いのをいいことに、さかんに詩人の分水荘へ通う日が多くなり、詩人もまた上諏訪に出できた折、わが家に立ち寄つてはまだ元気だった父と話しこむというふうに、家族ぐるみでのつきあいとなつていった。

先に私は十代の頃、あまり尾崎喜八のいい読者とはいえないかった…と書いたが、私との詩人の場合、それがかえつてよかつたようと思う。よく少年の頃からその作品をことごとく読み、憧れのあまりその作者を過大なものにまつりあげてしまつていることがある。「美しい」かどうかは知らないが、「没落の空間に幾変転して、その転身によこたわる秋の木の葉」は同時に私の姿でもあつた。」と。

その幾変転と詩人の負つた傷については次にまつりあげてしまつていることがある。稿があれることにしよう。若かつた無名の私や「私たち」をふくめての傷について……。

もちろん私とても、尾崎喜八のもとに行くとつたりするものだ。

き憧れといいようのない尊敬とをもつていた。

しかし必要以上の過大なものを持たなかつたために、私はまず人間尾崎喜八に会い、そのままに魅せられたのだ。私は今まで

生涯でさまざまなすぐれた芸術家にも会つたし、人間として実際に深い人にも出会つた。しかし今、最も魅了されたすばらしい人間を一人あげるといわれたら、ためらいもなく私は尾崎喜八の名を口にするだろう。私が初めて会つたとき、尾崎喜八は近代詩人としての業績をすでに為していただけだが、私にとっての詩人尾崎喜八は世間に知られていたそれとは別に、この富士見の人間尾崎のあとに新しく生まれたのである。

それにしても尾崎喜八が最も憔悴し疲弊した状態のときに会い、その人間尾崎が詩によつて復活する日々——その機微に立会えたということは私にとつて実際に幸せなことだったと思う。

「落葉」の詩の自註の終りに詩人はこう書いている。「美しい」かどうかは知らないが、

「没落の空間に幾変転して、その転身によこたわる秋の木の葉」は同時に私の姿でもあつた。

# 尾崎喜八先生と校歌

名取正義

校歌一覧表 (1990年8月16日調査編集)

	校名	所在地	制定	作曲者	備考
1	京華商業学校	東京都文京区	昭 6. 6.27	小松平五郎	
2	立教大学	東京都豊島区	昭 17. 12.10	小松平五郎	戦時中の新校歌
3	江別高等学校	北海道江別市	昭 24. 2.	平井康三郎	
4	磐城農業高等学校	いわき市植田町	昭 25. 2.10	小松平五郎	
5	信州大松本附属中学校	松本市桐	昭 26. 3.20	小松平五郎	
6	岡谷南高等学校	岡谷市湖畔	昭 27. 3. 1	井上 武士	
7	豊平小学校	茅野市豊平	昭 27. 9.16	保坂 泰正	
8	浅川小学校	長野市浅川	昭 27. 9.17	井上 武士	
9	甲府西高等学校	甲府市鶴田町	昭 27.10.	平井康三郎	旧甲府第二高校
10	豊科高等学校	南安曇郡豊科町	昭 27.10.26	中田 喜直	
11	大町北高等学校	大町市	昭 28. 3. 7	安部 幸明	
12	源池小学校	松本市県	昭 29.10.15	箕作 秋吉	
13	南相木小学校	南佐久郡南相木村	昭 29.11.28	江崎健二郎	尾崎補修
14	木曾東高等学校	木曾郡木曾福島町	昭 30(推定)	井上 武士	生徒会会歌
15	富士見高等学校	諏訪郡富士見町	昭 31. 7.21	平井康三郎	
16	日義小学校	木曾郡日義村	昭 32. 3.14	平井康三郎	
17	日義中学校	木曾郡日義村	昭 32. 3.14	平井康三郎	
18	松代中学校	長野市松代町	昭 34. 5.23	中田 喜直	
19	富士見高原中学校	諏訪郡富士見町	昭 35.11.14	岡本 敏明	尾崎補修
20	入山辺小学校	松本市入山辺	昭 37.11.15	團 伊玖磨	合併昭49山辺小学校
21	永明中学校	茅野市塚原	昭 38. 9.	中田 喜直	
22	新潟東工業高等学校	新潟市竹尾	昭 38.12.17	小山郁之進	
23	美和小学校	上伊那郡長谷村	昭 39. 2. 4	小山 清茂	合併昭51長谷小学校
24	岩村田高等学校	佐久市岩村田	昭 39. 6.25	高木 東六	
25	塩田中学校	上田市中野	昭 39.11.	團 伊玖磨	
26	長野工業高等専門学校	長野市徳間	昭 42. 5.10	今井 光也	
27	牧郷小学校	上水内郡信州新町	昭 42.11. 1	松本民之助	合併昭57中央小学校
28	安曇中学校	南安曇郡安曇村	昭 45. 3.14	飯沼 信義	
29	鉢盛中学校	東筑摩郡朝日村	昭 46.12.17	小山 清茂	
30	富士見小学校	諏訪郡富士見町	昭 47.11.15	和田 則彦	

信州富士見高原に尾崎先生の詩碑「富士見に生きて」が建てられて、今年で早くも満十になります。八月二十六日、第十一回の尾崎祭碑前の集いが催されました。高原の晩夏というのにこの時期としては珍らしく真夏の暑さを感じる高原の森で、実子夫人他多数の参加者をお迎えして先生を偲ぶひととき、先生のお声で「かけす」「田舎のモーツァルト」の詩の朗読がスピーカーから流れる、眼が何か異様にキリッとした、反面気持がおだやかになるのを感じました。今回は、地元高原中学校生徒三十名による校歌齊唱と、東京のメンルコール広友会七十名が特別参加され、尾崎喜八詩・多田武彦作曲の「かけす」「音樂的な夜」の二曲の献歌があり、最高に盛り上がりを見せ、有意義な集いでした。その席上で、先生が作詞された校歌の調査結果を発表しましたのでご報告致します。

### 校歌詞にみる尾崎喜八の風格

表をご覧下さい！先生の作詞された校歌は、なんと三十校に及びます。昭和六年の京華商業学校校歌から昭和四十七年の富士見小学校校歌に至るまで、四十有余年の間、殊に戦後の北海道江別高等学校から二十三年間に二十八校の作詞をなされたことは、なにか耳を踏んで確認がとれ、一歩また一步と深みに入る思いがして、言い知れぬ興奮を覚え、人胸に秘めて眠れぬ夜もありました。

三十校の校歌は長野県内が断然多く、小学

校、中学校、高等学校を合わせて、地区毎に北信四校、東信二校、中信十校、南信七校の計二十四校にのぼります。そこで長野県下を中心、校歌が制定される過程をエピソードなど含めて数校を引用してご紹介致します。

古くは川中島合戦で知られる海津城があり、真田藩であり、佐久間象山等著名人を輩出し、松代大本營、地震観測所等で有名な長野市松代町、城趾の根方にある松代中学校。この学校の昭和三十四年発行生徒会誌第五号に、校歌がで、記するまでの項があります。「校歌がほしい、というのは創立以来五年越しのねがいである。生徒総会に持ち出されたこともある：先生たちの職員会でも屢々話題に上った：校歌といふものは、やはり慎重に考えてゆきたい、というのが学校の態度であった。：校歌があつたらなあ、…」「一月、校歌作成の為に準備委員会が先生たちによって組織された、：善光寺平各中学高校の校歌が集められ、先輩の協力を得て都合四十校ほどになつた。

：『校歌といふものはむずかしいもんだ』といふのが検討の末に得た委員一同の感想であった。心のおもむくままに自由にうたう上げる詩ではない。我々の愛する郷土や、歴史や、学ぶ者の理想などもなるべくよみこみたい、というものが普通であろう。となるといきおい制約がともなう。：校歌の作詞作曲者は單に技術がすぐれていればよい、というわけにはいかない。立派な芸術家、だけでもまだ足らない。その上に、人間としてもすぐれた生涯

をつらぬき、あるいはつらぬきそうな人、といふ条件を加えて、尾崎喜八先生に詩を、中田喜直先生に曲をご依頼することになった。そして二月上旬には中村校長が上京され、尾崎先生のご快諾を得ました。先生は二月二十六日に松代へ行かれ、二日間に亘って地域を視察され、懇談を重ねられました。先生のすぐれた詩人としての風格は、接する人たちに深い感銘を与えました。

みどり松代朝あけて 信濃の山河さやかなり  
飯綱高くまなかいに 歴史は長き千曲川：

「詩を見せていただいた時、まったくすばらしいと思いました。校歌は校風の理想であり、象徴です。実現までこぎつけたそのファイトを忘れずに今後も一層全会員が…」と先輩からの激励の言葉も寄せられています。五月二十三日、尾崎、中田両先生が出席して盛大な校歌記念演奏会が行われました。

旅の心は寛容だから

他郷の自然や人間から

容易にその美を発見する

人生は旅だ

家にあっても この心を失うまい

先生は松代所懐として色紙に認めています。

また東信の千曲川上流にある岩村田高等学校の場合も、男子校、女子校両校が昭和二十四年統合され、どちらの校歌をとるか、あるいは新しい校歌を制定するかで決めかねて、校歌のない時代が続いたのです。『浅岳』第五号に生徒会顧問の先生の言があります。

「創立以来既に半世紀、長い伝統と歴史を有する本校に於て、旧岩中、旧岩女、夫々の校歌を内蔵する。しかも二十二年以來、学生歌「大湊岳」を我等がアルマーテとして、相繼ぎ相伝えて来た。今ここに新しい校歌を設けることの困難なことは、如何に生徒会に熱望ありとは申せ想像に難くないのである」。

しかし昭和三十八年七月の職員会で慎重審議を経て、校歌作成準備委員会が設けられました。校歌の在り方をめぐって、伝統と前進、懐古と革新、百出する論議の中で難航を重ねたすえ、新校歌を作ることが決定され、作詞依頼候補として尾崎喜八、三好達治、大木惇夫の三氏、作曲は高田三郎、小山清茂、清水脩の三候補者が上げられ諸氏の略歴が紹介されました。そこで佐久に最もゆかりのある尾崎喜八先生に交渉することに決り、校長と委員の一人が十二月二十二日に上京して先生の快諾を得たのです。但し作曲者には尾崎先生の強い要望で、高木東六先生に依頼することになりました。尚、岩高誌によると、

「十一月下旬、尾崎先生が来校された。夕闇迫る雪の校庭に立たれて、はるかに秀麗の浅間を仰ぎ、遠く千曲川の清流に耳を澄ませながら、祈るようにして靈感を持たれた作詞者尾崎喜八先生の敬虔な姿には、委員一同心をうけられたものである」。三十九年六月二十五日新校歌制定式ならびに披露演奏会が催され、尾崎先生はじめ県教育長も出席して祝福されました。在校生のIさんは誇りに思う校歌と題して「曲の雄大さと、穏健な中にも大切な

教えの一句一句が浮き出ています。“学を深めて、身は直く、心に徳を育めと…”は学生の根本精神であり、私の好きな歌詞であります」とのべています。

尾崎先生には、ご自分の詩に解説を加えられた、すばらしい『自註富士見高原詩集』がありますが、校歌の作詞でも必ず歌詞に添えて、ご自分のお考えを書かれて学校へおくりられています。長野県下で最初に作詞されたのは、昭和二十六年三月で、長野師範学校女子部附属中学校が信州大学教育学部松本附属中学校に生れ變る時でした。先生は手紙の中で、「…歌詞については別段註釈を施す程の事もないと思いますが、第一節初めの「王が額」は勿論、美しき原高原「王ヶ鼻」の意味あります。又ところで、歌としてどうかと思ひあの山の形といい、その立派さといい、寧ろ王者の額に如かないと考えた結果であります。又ところどころに類音あいなすを用いてあります。たとえば、第一節の初めの、あしたアルプス、三行目、信濃おとめとおのことここに、第二節初めの、梓梓ならいのながれにうつる、二行目、むかしふかしのいま△△まつもと、第三節初めの、もゆる春辺のもちの花は、などこれは歌曲となつて歌う場合或種の魅力になることです。作曲者へは清らかに、男々しく、勇ましくと註文を添えて置きました。」と記され作曲には一番古くからの友、小松半五郎（小松耕輔氏令弟）先生を選ばれています。

校歌及び団歌等を通じて、この時すでに八曲

目のコンビというべきでしょうか。作詞者の言葉として一番多く語られたのは、やはり松本の入山辺小学校の時でしょう。「むかし美しき原では詩を書いたし、いま入山辺の学校の校歌を作ることになったことに感じずにはいられない。校長さんと教頭先生のご案内で、学校や地区の環境、その自然、文化、農作等、種々の景観を私なりにくわしく見て、感じて、そしてこの校歌の歌詞は出来上がった。校歌は母校への愛と尊敬との表現であるべきだから、郷土の美を強調しながら常にその中へ学校のすがたを浮かび上がらせた。まだ作曲は見ていないが、この気持をくんで、きっと美しい旋律で満たされたものが出来たことと思う。まことにご同慶の至りである」とお手紙を送られています。作曲者は團伊玖磨先生です。三十七年十一月十五日の発表会当日、お二人が招かれて出席され、その席上團先生は次のように話されました。

「尾崎先生のすばらしい歌詞をいただいて、僕は一生懸命作曲しました。作曲をする時は、いつもペンで音譜を書くという仕事の前に、言葉を全部よく覚えて、その言葉のイメージといいますか意味に合った曲を作ることを心がけています。昨日入山辺へ伺つて、つくづく歌詞のとおりの場所だと感じました。そして普通の校歌とちがつた歌詞のすばらしさがわかりました。山がお好き、信州がとて、その気持が、このすばらしい言葉になつたの

だと私は思います。歌詞にありますように、大きな樹のように立派に真っすぐ育つてくださいとお祈りします」。こうして開校後五十二年目に、入山辺の自然の美しさ、民情、理想をみごとにとらえた三番までの校歌が生まれ、山の子らは力いっぱいよろこびの声をあげたのです。

なお松本平薄川べりの源池小学校では、

二十九年十月に新校歌が制定され、先生の講演に引き続いだ児童一般、満員の聴衆の中で

NHK専属作曲者簗作秋吉先生の校歌についての解説があり、N HKうたのおばさん松田トシさんの歌の指導で、すばらしい発表音楽

会が行われました。その折に「この校歌は第

二節に、高揚した気分をみなぎらせ、源池小学校の歴史的な伝統や自然環境をたたえ、愛。愛。

正剛の気風、楽しく学ぶ小学校という期待をもって」と尾崎先生は語り、簗作先生も「この曲は二部形式でやはり二節目を強調した。伴奏はすぐに混声合唱になり拍子も二拍子・六拍子用に遠足などにも楽しく歌えるよう」などと話された。なお松田トシさんは美しいハーモニーをもち、気品の高い校歌であると評しました。

### 「山の詩人」としての尾崎喜八

中信地区が早くから尾崎先生と親交があつたのは、講演会の開催が勿論のことながら、やはり山とのかかわりが非常に濃いからだと思います。昭和二十二年六月、日本山岳会信濃支部が結成されて、初代支部長にはスイス

アイガ一東山稜初登攀に成功された榎有恒氏、そして二十五年春から尾崎先生が二代目支部長をつとめられました。国体の役員として学生等とともに山に登られ、上高地のウエストン祭を盛り上げ、そして信州の高原と山とを格調高い詩文にうたいあげました。そのゆかりの上高地には『山に祈る』の塔があります。

なお松本平薄川べりの源池小学校では、流転の世界必滅の人生に成敗はともあれ人が傾けて悔いることなきその純粹な愛と意欲の美しさ

北アルプスの山々より流れ出る梓川の清流が、深い島々谷を下つて安曇平に注ぐその口元に安曇村島々があり、梓川左岸の段丘上に安曇小中学校があります。昭和六十二年に新しく装いのなったすばらしい校舎、前庭の校歌碑、そして玄関に作られたガラス戸棚には、当校の親善訪問地スイス国グリンデルワルト村での写真と、ベレー帽を冠つた在りし日の登山家尾崎喜八の遺影が飾られ、校歌の作詞者として紹介されています。上高地と尾崎先生、尾崎先生と安曇村の人びと。先生と二十年來の親交を得ていた岳友の青柳氏をはじめ前田村長、PTA・村民一致して、先生に校歌の作詞をお願いしました。鎌倉へお訪ねした青柳氏は「眼光の鋭い、神経の繊細な尾崎先生ですが、遠来の岳友を温かく迎えて下さい：赤土の剥き出た岡の上で、いつまでも別れの手を振つてくださった老詩人の姿は、今

もって私の脳裏に鮮明です」と述べています。

作曲は地元安曇野出身の飯沼信義先生です。

大町北高等学校卒業生のOさんは、北校校歌について「：安曇野の素晴らしい自然に育まれ、高い理想を抱いて過す若人たちの学舎の姿が、この校歌には余すところなく歌い尽されています。時は移り、友垣は遠くはるかになつた今も、私の若き日的心と夢をはぐくんだ母校と校歌を、私はいつもなつかしく思っています」と言いました。

この話を聞きながら、心をこめて先生が作られた各学校の校歌が、たとえ世の中の気風が遷り変つても次の世代を背負う若い人びとに歌いつがれ、伝統・校風と共に心の糧であり、生きることの喜び、希望の支え柱であつて欲しいとしみじみ思ったのです。

校歌にまつわる多くのエピソードがありますが、ここで制定とその記念事業の一端について先生ご自身の隨筆がありますので、是非皆さんにご紹介したいと思います。芸術新潮－音楽と求道（四三年～四七年毎月連載）の中から「…この夏に校歌の作成を頼まれた松本平の某中学校のために、その発表会と校歌碑の除幕式に参列するためだった。作曲者は信州出身（更級郡）の小山清茂君で、彼自身にも気に入つたような良い歌が出来た。二人は松本の駅頭で久しうぶりの再会を喜び握手をした。彼とは六、七年前にも自分の書いた校歌の歌詞に大変見事な曲をつけて貰った因縁があるのである。三日間の旅行中、信州の天気は毎

日美しい冬晴れだったが、わけても発表会当日は一日じゅう雲一つない快晴だった。会は秩序をもつて盛大に行われ、男女の生徒全員の混声合唱が実際に堂々として壮大だった。そしてこれに聴き入っている教職員や父兄の顔は晴ればれと輝いていた。なかにはまぶたを拭っている人さえあつた。私も思わずほろりとした。それほどけなげな合唱ぶりだった。

校歌碑の除幕式は、正面玄関前の岩石公園とも言うべきいくつかの巨大な石に飾られた広い庭園で行われた。碑は若い白樺の木に囲まれて、小高い芝生の上に毅然として立つていた。私の字で書いた校歌を刻み込まれた石は、スウェーデン石という黒い堅い岩石で、愈々磨かれてつやつやと光っていた。そしてその前方に整列した全校生徒の力強い合唱の開始を合図に、白い幕は私と小山君との手で取り除かれた。感動的な一瞬だった。…やがて私は祝宴から独り席をはずして、長い廊下を玄関まで出て庭を眺めた。すると上級の女生徒が六、七人まだ碑の前を去りやらずに、芝生の夕日に照らされて佇んでいた。遙か南の諏訪の空に八ヶ岳がくっきりと全容を現わし、東の正面には赤々と夕映えに染まつた鉢伏・美しが原・武石・袴越しの峰峰、そして西の背後には逆光の中にそり立つ穂高から白馬まで北アルプスの連峰があつた。私は自分の歌詞が自分の筆蹟がそして自分の名が、此處にこうして半永久的に残ることを考えて、嬉しいような、悲しいような一種複雑な感慨に襲われるのだつた。…」これは東筑摩郡

鉢盛中学校のことでの時の校長は当日松本駅でお見送りの際、先生がもう一度鉢盛を訪ね校歌碑の前に立ちたいとおっしゃられ、再度お出でいただきことをお約束しながら、お亡くなりになられてしまい、まさに残念ですが、先生の心は当校の校歌として、いつまでも生きつづけることでしょう、と述懐された。

いたるところの歌「木曽の旅」の文中で先生は、木曽義仲成人の地、宮の越の日義小学校と中学校両校の校歌をかつて作られた。のちに講演に寄った時、子供たちの喜びと同感のために鳴らしてやろうと思つて、二つの由緒ある鈴をポケットに忍ばせておいた。しかしざとい時、彼らの歌つてくれたその校歌の合唱のあまりけなげで美しいのに感動して、ついうかり鈴のことを忘れてしまつた。  
「木曽川いまだ源の、清冽うたう宮ノ越…」  
平井康三郎さんの作曲がまた実に見事だつた。と記した部分があります。作曲者とのコンビが校歌でも不可欠なことは言うまでもあります。平井先生は戦後最初の作詞である北海道江別高等学校、二十七年甲府第二高等学校（西校）、三十一年富士見高等学校と全部で五校の校歌コンビとして縁の深い方です。

山間部校の閉校・統合になお残る詩魂 時の流れの変遷は、ついに長野県下でも山間地人口の過疎化をもたらしました。昭和四十年代後半から五十年代前半にかけて、当然児童数の減少が学校の廃校、閉校、合併、統合を余儀なくしました。学校は地域において

は教育、文化の泉であり、住民友好の場でした。ましてや長い伝統と歴史をもつ学校は地域の人びとの心を培つてきたものです。上水内郡信州新町の牧郷小学校が、上伊那郡長谷村の美和小学校が、そして先に紹介しました松本市の入山辺小学校がそれでした。

犀川沿い景勝の段丘上に閉校した牧郷小学校跡は今もありました。古い校舎前に高さ約二八〇センチ、幅九〇センチ、厚さ約二四センチ、台石約七トン。上部に校章をあしらい、つづいて「牧郷小学校跡」と大書し刻まれています。その左方に尾崎先生の作詞になる自筆の校歌碑が石に刻まれて立っていました。牧郷閉校誌によれば初雪の降つた昭和四十二年十一月二十二日村を訪れるまわりをし、生き生きと児童にお話をなされ、校歌にもりこむ内容を子どもに問い合わせられた。山のこと、犀川のこと、歴史の古いこと、四季の美しさなどを歌の中にもりこむことを約束して帰られたようで、翌年一月十一日「明けゆく朝の山の色、犀川清く谷深い、この牧郷をふるさと、呼ぶは我等の喜びぞ」の校歌が到着したのです。しかし幾多の沿革を経て百八年、一世紀余に及ぶながい歴史を残してついに五十七年には閉校となつたのです。

天竜川上流の三峰川の右岸段丘上の美和小学校の場合、昔、孝行猿の物語で有名な伊那里の小学校を吸收合併しました。長谷小学校となつて校歌もかわりましたが、玄関前の校庭には「少年よ少女よ、この美しい郷土から、大きいなる世界が、おんみらにひろがる」美和

学校九十周年記念碑言葉並書尾崎喜八という大きな碑が建てられています。

松本市街を流れる薄川は、美しき原山麗から下つて奈良井川に合流します。この川に沿つては松本城よりも、もつともっと古い歴史を語ることができます。先生はこの河岸段丘沿いに扉崎から美しき原へ入られたこともあります。「登リツイテ 不意ニ開ケタ眼前ノ風景ニ、シバラクハ世界ノ天井ガ抜ケタカト思ウ：」という有名な詩が美しの塔にはめ込まれています。その山ふところ、美しい自然に恵まれた平和な村の学校が入山辺小学校でした。明治四十四年開校以来今日（昭和四十九年）まで六十余年、学びの庭も閉校して薄川下流域山辺小学校と合併して山辺小学校となつたのです。何か割り切れないものがあり、哀惜の情已み難い感があつたと地区の人びとは語っていました。そこで区民は一体何をなすべきかを自問自答し、学校所在のあかしとして後世に残るものを作り、思い出と郷土の史跡を、の願望を結集して校歌碑を建てることに決めたのです。郷土の銘石山辺石へ、先生自筆の文字を銅板に焼付けてはめ込んだ、高さ三メートル幅三メートルにもなんなんとする堂々たるいしづみで、校歌碑というよりも、モニュメント、記念碑なのです。閉校式委員長の赤羽さんは「今後私共は、いかなる立場にあつても、いかなる地位になつても、何時も此所に来て、この碑を仰ぐたびに、育てられた郷土を思い、勉強した学校を思い、指導してくれた先輩を思い、遊んだ旧友を思い、

教訓をいただいた恩師を思い浮べて感謝しようと。そして地区の後継者である児童等の、健全な成長をいつも見守つてくれることを願つて」と述べています。校庭の本来ならバックネットを建てる大切な一隅に西方へ向けて建てられた校歌碑。木々の葉がばつばつ色づいた深い谷あいの段丘上に西日が落ちる、その最後の光に金色に輝いている碑面の連々とした文字の美しさ。私は思わず「夕映に立ちて」を身体一杯に感じ、目頭がうるむいしれぬ感動を覚えたのです。

#### 有終の美 信州富士見高原にて

戦後、尾崎先生は信州富士見高原にこられ

た。なだらかで広大な八ヶ岳山麓、その分水荘の森の中で、お疲れになられた心身を癒しておられた。高原を散策するうちに、元来の自然を見るたしかな眼と高潔な誌魂が甦って、忽ち心身の恢復を呼んだのです。翌二十二年にはこの森に遊ぶ子供らの為に「高原の子供の歌」をスウェーデン民謡「美しきヴァエルメラント」につけて作詞されました。

いでしようか。

先生が一番初めに作られた校歌は、出身校の京華商業学校の為のものでした。そして最後の作となつたのが、先生が第二の故郷と言われた信州富士見の小学校校歌だったのです。この不思議なめぐりあわせは、或いは先生にとっては当然の帰結なのかもしれません。そして校歌の発表が行われた昭和四十七年十一月十五日、この日の為に夫人を伴つて出席された先生にとつてこれが最後の富士見となるのです。

当時の五味校長をはじめPTA諸兄の努力と地域住民の皆さん協力によって、この奇縁をつくり上げて下さった事に敬意と感謝を表するものです。

白樺そよぎ、空は青く、  
風は涼し、夏の日も。  
さえずる小鳥家に近く、  
遊ぶ池に映る雲。

ここに育ちて、ここに学び、  
いつか都に帰るとも、  
思え、たのしかりし日を。  
(三番略)

山立ちならぶ信濃の国、  
われは愛すこの国を。  
春風吹けば鬼つつじ  
咲く八ヶ岳の裾野、  
ここに生れて、ここに育ち、  
遠き他國は知らねども、  
愛す、うるわし我が里。

校歌発表の式典のあと職員玄関の上にあつた裁縫室で、尾崎先生と実子夫人、それに作曲者和田則彦氏（富士見小出身）出席のもと、

学校職員とPTAそして同窓生が場所も狭し  
と一堂に会し、校歌制定と校歌碑建立の祝宴  
が催されました。先生は尽きぬ思い出の中で  
終始感動の涙、涙、涙が拭いきれず、奥様が  
脇からハンカチを渡していられるのを見て、  
我々とともに涙を流したのでした。忽ち時も  
すぎ、誰かうとなく誕生したての校歌を「連

なる峯は八ヶ岳、はるかに高い富士の山…」  
と歌い出すと、会場の全員が以前より覚えて  
いたかのように、すらすらと「空気は清く光  
ゆたかな、ここは信州富士見高原…」と声高  
らかにうたい、共々涙して興奮の渦の中、一  
大合唱となつたのです。

昭和四十九年二月

「山深い信州の当地にお出で願い校歌の作詞  
をいただいた先生は今もここに生きています。  
つつしんで先生のご冥福を祈ります」

—マキサトショウガツコウ—

長野県上水内郡信州新町牧郷小学校からの  
弔電でした。

私は、尾崎家から提供された、先生ご葬儀  
の折に寄せられた各学校からの弔電をもとに、  
探索の旅をつづけて参りました。その間、各  
学校の関係者新旧の方々に一かたならずお世  
話になりました。誌面を借りて改めてお礼を  
申し述べます。そしてこの他にもまだ我々の  
知らない未詳の先生作校歌があるのかもしけ  
ません。今後共研究会各位のご協力を願い  
申し上げ筆をおきます。（平成二年十一月）

\*資料 1\*

## 生態写真家としての尾崎喜八

（編集部）

尾崎は昭和四、五年頃から自然の事を本格的に勉強しようと願い、専門書を読み、採集し、観察し、専門家に教えを請い、一つづつ知識を身につけていったのであるが、その中の一つに山・自然の風景・植物などを撮るための写真もあった。イコンタのジャバラ式、手札型乾板のカメラを求め、植物の武田久吉博士の懇切な指導のもとに始めたのであつた。約十年に亘る間に撮ったその乾板は大部分が幸いにして戦災を免れ、現在約七五〇枚程残っている。

書誌を調べていられる嘉納忠明氏の手によつて、当時の雑誌「アサヒカメラ」などに載つてゐる尾崎の文章や、自身撮影した写真に説明をつけたもの、当時の写真界で活躍しておられた方々との座談会の記事などがコピーして手元に集められたので、7号ではその中的一部をご紹介したいと思う。

さきに述べた七〇〇余枚の乾板は、戦後約四十年間尾崎の本家である立川の奥の旧農家の蔵に預け放しになつていても、膜のはがれたものなどは極く少数で比較的によい保存状態であるが、やはり多少の歴の被害は免れなかつた。フィルムの方は殆んどが戦災にあつたらしく、データつきの雲の写真はフィルムが多かつたので誠に残念である。

戦後の富士見時代は被写体にこと欠かなかつたであろうに、フィルムを買うお金がなかなかつたり、写真機自体が質屋のお蔵を出入りしていた時代だったので、本人にしてみればさぞかし無念に思つたことも度々であつたろう

乾板が残つてゐるので復元して掲載した。  
「日本生態写真研究会」という「野鳥」昭和  
十一年の記事は、當時このようないい会があり、  
このようなメンバーで展覧会が催されたとい  
う証しに転載させていただいた。

（尾崎栄子）

## 日本生態写真研究会

## 秋の詩趣

今般、動植物生態写真の諸権威を糾合して一層其發達を計るため、日本生態写真研究会が生れた。役員左の通り。

名誉会長 侯爵 山階 芳暦氏  
会長 伯爵 清樓 幸保氏  
顧問 農学博士 内田清之助氏  
理學博士 武田 久吉氏  
理事（イロハ順）  
石沢 慶鳥氏 岡田 喜一氏  
尾崎 喜八氏 河田 黨氏  
塚本 閣治氏 下村 兼史氏  
幹事 福島 勤一氏

尚ほ、科学知識普及会と共同してその第一回展覧会を六月十七日より二十日まで銀座伊東屋に開催、非常な好評を博した。出品者は左の通りで、さすがに本邦最初の総合的大展観たるに恥ぢない。

長谷川伝次郎氏一点、本庄伯郎氏五点、堀内讚位氏一点、石沢慈鳥氏十点、加藤邦三氏五点、河田黨氏十点、清樓幸保伯十三点、松山資郎氏一点、中西悟堂氏五点、岡田喜一氏十点、奥村定一氏二点、尾崎喜八氏五点、葛精一氏一点、下村兼史氏十点、武田久吉氏七点、塚本閣治氏十点、山階芳暦侯三点。

（「野鳥」昭和十一年七月号）

「うつとりするやうな、ほのかに暑い十月の或日、丘の上には葡萄畠が黄金いろに光り、森は木の葉の力強い褐色がかつた金属的な色にきらめき、農家の庭には白や紫、一重や八重、あらゆる種類と色彩との蝦夷菊が咲いてゐた。こんな日に村から村を経めぐつてそぞろ歩きする事は楽しかつた……」

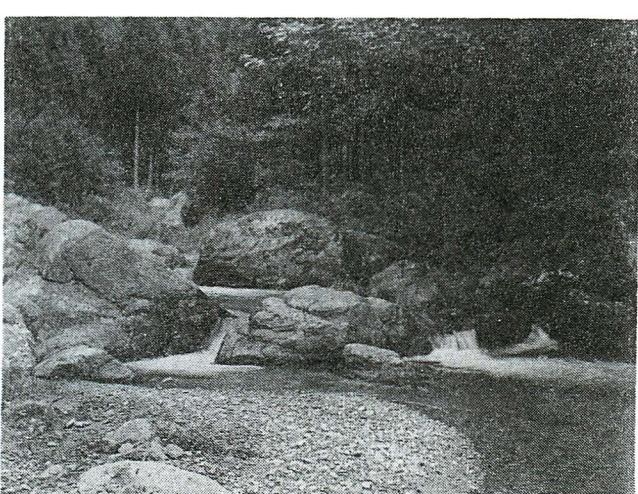
「到るところで、熟した葡萄や新らしい葡萄酒の香がした。誰も彼も取入れの場所や庄搾所の近くの野天に出てゐた。急な坂になつた葡萄山には、襯衣の袖をまくり上げた男達や、多彩の色の上着を着たり、赤い布を頭へかぶつたりした女房や娘達の働いてゐるのが見えた。老人連は家の前へ腰をかけて日向ぼっこをし、鳶色に焼けた皺だらけの手を揉みながら、此の美しい秋をたゞへてゐた……」

「秋」の美しい感銘と、自然が急に其の面目を改めたやうに静謐な、きらびやかな秋の日曜とが、私を遠く田舎の方へ誘ひ出した。何処へといふ大して極まつたあても無く、到るところに自然の詩趣を汲みながら、カメラ片手に一日をそぞろ歩きするのは本当に楽しい。それは人知れず赤らむ木の実の喜びのやうな、素朴ではあるが深い心の幸福に価しよう。

何時かしら堅い直線的な国道や府道から離れて、歩くに楽しい田舎道へ入つた。片側に

櫻や櫻の防風林を持つたり、こんもりと円い頭に日を浴びた茶畠を控へたりして、それ自身が由緒ある歴史や芸術になつてゐる村の道。私はお前を写すよ。愛の眼が、お前の最も生き生きした瞬間にお前を捉へる。それは未だ午前中、太陽が天の真南へは達しない時、光と陰との豊富な時間だ。私の素人の経験が、こんな時あまり広い範囲を取り入れると私は教へる。其の性格の特長をつかめば、村道の詩は成るやうに私は思ふ。

颶風に見舞はれる日本は、併し又其の償ひのやうに雲の美しい秋を恵まれてゐる。二百十日・二十日前後の空へ、あの長い釣針や紗のスカーフとなつて現れた巻雲も美しかつた



が、今日は澄みわたつた十月の地平に近く、

牧する羊のやうに散つてゐる可愛い雲だ。多分片積雲かと思はれる此の雲は、晴れた日ならば他の季節にも出る種類だから、私は其の前景へ何か一寸した秋を象徴しなければなるまい。丁度いゝ、畠の片隅には燃えるやうな葉雞頭や、淡紅いろの花の房を見事につけた大毛蓼が立つてゐる。これを入れよう。空の明るさで雲が潰れてしまはないやうに、さうかと云つて空や地物があまり暗く落ちないやうに。これが私の苦心だった。

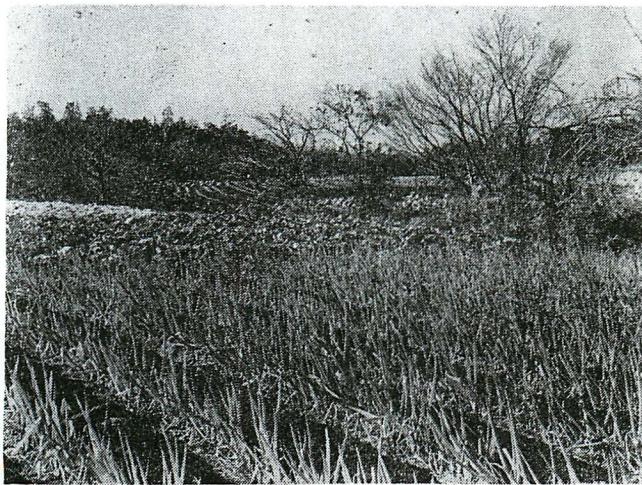
地面へ影の綾をゑがく梨畑があり、五六羽の家鶏の遊んでゐる池があり、軒下に玉蜀黍を吊るし、庭先へ真紅の唐辛子を乾し並べた農家があり、ちらちら光る珊瑚樹の生垣があつて、やがて野紺菊に縁どられた堤防への道。私はさうした風物を詩の断片のやうに眼やレンズで受けとりながら、風と光とが自由に遊ぶひろびろした河原へ出た。

私はほのぼのと温い砂利の上へ腰を下ろす。対岸には一連の丘陵が、松や檜の黒ずんだ緑や、香ばしく焦げた雜木林に彩られながら、蜿蜒と続いてゐる。下流の空は淡い龍膽色をして、葦のやうに立つた積雲の列が、其処に海のある事を想はせる。上流の奥の方には山が見える。今日は其の山の地膚の、一本一本の皺まではつきり見える。うつとりとして煙草を吸つてゐると、頭の上で笛の音のやうな小千鳥の声がする。あたりには赤く色づいた柳蓼や、河原蓬の銀いろの円い株や、もう来年の準備をしてゐる待宵草の薔薇結びが点々

としてゐる。

対岸へ行くのに橋が無かつた。だがそれに代る渡船の有る事が、却つて今日のやうな散策にはふさはしかつた。私は一銭を払つて向岸へ渡り、再び桟橋を離れて秋の水に棹さして帰る其の小舟と渡守とを、次第に亡びてゆく古い日本の詩的遺物として写すのだった。

堤防を越えると又梨畑。やがて部落。此のあたりの断層の凹地をあらはす名として、よく「何々ヶ谷」とか「何とか谷所」とか云はれてゐる部落の一つ。其の部落と後の丘との間には水田が作られて、もう刈入れも間近かな、すつかり熟れた稻がいゝ香を漂はしてゐる。ふつさりした穂を手の平に載せる、と



実りの秋の重みは金のやう、鼻に近寄せて嗅いでみれば、かすかに爽やかな穀物がほふ。稻や栗の穂といふ物は、カメラを持つ者にとっては麦の穂よりも誘惑的だ。私はうまく垂れてゐる其の豊年の重たい穂を、思ひきつて近くから撮影した。

丘陵の登りに掛るとさまざまな秋の草花が現れて来た。黄色いアキノキリンサウ、空色の龍膽、薄紫の野路菊などが。野葡萄の実は紺に、その大きな穂ばんだ葉は黄から朱に。そして栗の実はいがを其儘湿めつた小径にころげてゐた。或處ではしんみりと照り、又或處では梢を透かして千百の縞を織る日の光。結果はどうか知らないが、出来るだけ暗部を

標準にして、さういふ植物や、「獵人日記」風の単純ではあるが無限の詩趣を感じさせる林に向つてレンズを向けた。

登りきると其処からの眺望は、さつき河原で想像してゐたのとは全く違つて、谷から丘、丘から谷、又ずっと向うに別の丘、まるで澎湃として続く大地の海の波だつた。此の地形の繰返しと、それを剥す処なく利用して殆ど広大な庭園のやうにしてゐる耕地と山林との美しい配置は、單に風景写真の立場からよりも、一層人文地理学的乃至景観地理学的写真の好個の題材として私の興味を牽いた。燐々と照りそゝぐ十月の太陽の下、それはまるで黒と淡緑と鳶色との鮮かなモザイックだつた。



其間に、丘の中腹や麓から、淡青い真昼の煙を上げてゐる幾つかの村落、生活への敬虔な帰依のやうに村々を繋ぐ道の糸。私は此のパノラマ写真を、出来るならば大きく引伸してみなければならない。

やがて私はゆっくりと丘を下つて、高みから遙かに眺めた前記の部落の一つへと進んで行つた。谷に臨んだ丘の斜面に籬壇のやうに農家を並べた其部落は、丁度柿の実の熟す盛りだつた。あらゆる家がそのまはりに柿の樹を植ゑ、あらゆる柿の樹に累々と実が成つてゐた。或物は黄に、或物は朱紅色に、部落全体は此の無慮幾十万個といふ柿のために、重たい空間に楽しく脅かされてゐるやうだつた。

私は当然のやうに淡いフィルターを添用して、パンクロでそれを写した。

其のあたりは一帯に柿の名所だつた。私は家苞として見事な一枚を貰ふ事が出来て、それをかついで再び道をつゞけた。其の一枝の礼として一枚の印画を送る事を必ず忘れないと固く心に誓ひながら。

何處までも歩きたいやうな秋の一日、それから電車へ乗る日の暮まで、又いろいろな題材があつた。

(「アサヒカメラ」(臨時増刊) 昭和十一年九月二十日「アマチュア秋の写真術」)

## 山を歩いて草花を写す

山野の植物に趣味を持つてゐて、目に触れた都度これを觀写したり採集したりする傍ら、その自生地に於ける彼等の天然の姿を撮影して置く事が出来るとしたら、自然の中をさまざまよろこみの倍加される事は勿論、仕上つた印画は特に植物にのみ捧げられた君のアルバムを永く飾つて、それを繙く度毎に、彼等に対する愛や思ひ出が一層深くさせられる事でせう。なぜならば、それは鉢植や花壇の物を写したのとは違つて、多少なりとも彼等の土を其の画面に含んでゐます。即ち、写された範囲が広ければ其処の地形や近隣の植物相が、狭ければ狭いで岩なり土なり、又天然に散り積もつた枯葉なりが画の中に取入れられてゐます。しかも其れは君が往つて君自身

の眼で見たものです。そして独り対象とされた植物のみでなく、同時に其の生活環境をも画面に包括するといふ事は、其印画に貴重な記録的価値を与へると共に、又一味の風韻なり気品なりをも添へる事になるでせう。此のためには先づ最初の植物其物の選択と構図の採り方とが第一であつて、対象の周囲を余り町寧に掃除したり、余計な手を入れたり、写してから折角仕上げた印画にトリミングを施したりするのは、却つて面白くない、飽きの来る結果を齎らすものと思ひます。

さて之から春の山を歩きながら植物を写す話を少しばかりするのですが、其前に最も必要と考へられる事柄だけを手短かに述べて置いて、それからカメラを持つて出掛ける事にします。

カメラは焦点硝子を覗く事の出来る式のハンドカメラを適當とし、サイズは密着印画でも充分鑑賞の出来る名刺から手札判ぐらゐを良しと考へます。二段伸の器械ならば一層便利です。三脚は先づ絶対に必要で、雲台も此際の常備品に數へます。記録印画として極度にピンぼけを忌みますから、三脚・雲台共にぐらつかない事を至の条件とし、焦点面の鮮鋭度を調べるために拡大鏡の用意も有つて然るべきだと思ひます。フィルターは紫外線遮断用の物一枚と、標準整色用の物（例へばラツテンK<sub>2</sub>級の物）一枚とを持つて行かれることをすゝめます。感光材料に就ては、今日では乾板・フィルム何れも相当な優秀品が一般に使用されてゐるやうですから別に云ふ事

もありませんが、只、普段余り使ひつけない物は寧ろ避けた方がいいと思ひます。ほんの参考まで申すのですが、私としては費用が比較的少くて済むのと結果が良好なとので外国製品ではS・G・パン、イゾクローム、国産品ではサクラのクローム・スペシャルなどを常用してゐます。露出は、其の時々の作画の意図によつて一概には云へませんが最明部から半暗部ぐらゐまでのデイティールを出したい関係上、少し過度と思ふ位に掛けて置いて現像の際いくらか浅目に仕上げた方が好結果を得るやうです。それからカメラへ取粹を取り付いた間ちう、及び捕蓋の抜差しをする場合には特に、必ず黒布を被せてする事を忘れてはいけません。実は一般的の撮影の時でも此の心得が無くてはいけないので、わけても山の草花の接近撮影では露光時間の長いのが普通ですから、光線引きの危険率もそれだけ多いわけであります。又印画の清明を得るために、レンズフードの常用も実行されなくてはなりませんまい。

さて、話は未だ沢山有るのですが紙数も限られてゐる事ですから此位にして、もう山へ来てある事にしませう。

此処は平和な山村を出はづれて、やがて溪谷に沿つた小径から若葉の山への登りになると云ふのんびりした静かな春の路傍です。階段状に作られた山畠のふちに、アネモネによく似た葉をして、外側に白い短い絹のやうな毛を密生して花をうつむけに半開きにしてゐる高さ四五寸の草があるでせう。これはオキ

ナグサで、矢張り實際でもアネモネの親類です。花の外側が白い光沢のある毛で被はれてゐるのに、内側は黒ずんだ紅ですから、うつむきに咲く此花を写すには、どうしても幾らか其の神秘的な内側も覗けるやうな位置にカメラを据ゑなくてはいけないでせう。葉も茎も上の方になる程毛に被はれますから、此毛の美しさを出すためにも可成小さく絞ります。側光を受けさせて半調色を生かせば見事な印画が酔いられるでせう。もう一種、写して写し采えのある花が直ぐ近くに咲いてゐます。ちよつと西洋の雛菊を想はせますが、あれよりも遙かに清楚で、野性の詩趣に富んでゐるではないですか。これがアヅマギクです。葉は薔薇結びになつて地面を抑へてゐます。其の真中から茎が七八寸の高さに伸びて頂点に花が一輪。此花は周辺が藤色で中心が黄色ですから、それを出すためにK<sub>2</sub>級の整色フィルターを添用します。天気は快晴、蛇腹の伸びを勘定に入れても、絞十一、イゾクローム・フィルムを使用して、先づ $\frac{1}{2}$ 秒といふ処でせうか。序でに云つて置きますが、草が風に揺れて止まないと云つて、短気瞬間ピタリと風が止んで後悔の脣を噛む事が多いのです。植物の撮影には特に忍耐が要求されます。さて此のあたりには未だホタルカヅラとか、ヲカラグルマとか、フデリンダウ

とか、其他色々のスミレの類などが有りますが、それぞれ氣に入つたのを旨く写して頂く事にして、今度は谷の方へ下りてみませう。

五月の谷間は今や全く花の盛りです。此の幾十種をもつて数へられる草花を、小鳥の歌や水のせらぎを聴きながら、新緑と太陽とのいゝ御天気の午前から午後を半日かけて写し廻る楽しみに、抑も都會のどんな娛樂が較べられるでせうか。ネコノメサウ、ヤマネコノメサウ、カテンサウ、ヒメレンゲ、ヒメウツギ、スズシロサウ、ユリワサビ、エンレイサウ、シロバナエンレイサウ、ハシリドコロ、イチリンサウ、二リンサウ、ヤマブキサウ、アフギカヅラ、ラシャウモンカヅラ、ニシキゴロモ、イカリサウ、ヒロハナコンロンサウ、エビネ、シユンラン……之だけ書いても全名簿の何分の一にしか当りません。それに又谷を渡つて山へ掛かれればミヤマカタバミ、ナガバノスミレサイシン、カタクリ、サイハイラン、チゴユリ、イハウチハなどと云ふ素晴らしい連中が君を待つてゐます。とは云へ余り一時に写さうなどと欲張らずに、慎重に無駄のないやうに、優秀な一打を得て帰らうとする心掛けこそ肝要です。

こんな事を云つてゐる内に紙数も残り少ない印画を得られさうな花を一つ二つ述べてみませう。

其の一つはアブラナ科のスマシロサウです。

清らかな水に湿めつた谷の砂地、小さい岩のかけらが自然の盆石になつてゐるやうな処に

花の丈三寸から五寸、白磁の色の十字花を散開してゐる清妍な姿は、他の植物と混生してゐないだけに、そつくり其儘画になるでせう。

総状花序は下の方から咲上るので、茎の下部には既に線形の角果が実を結んでゐる筈です。これも隠れないやうに写すために、三脚は伸ばさずに使つた方がいいと思ひます。近所には同じやうな物でユリワサビがあるでせう。これも撮影には好適な植物です。

だらだらと谷へ向つた半日蔭の斜面こそ自然の花壇です。此處で黄色い大輪の四弁花を咲誇つてゐるヤマブキサウを是非写しませう。

これは寧ろ其の見事な群落を写した方が良さうです。茎の高さは一尺ばかりですから、谷の青空の光を一方から受けさせるやうにして、少し離れて斜め上から私は写した事がありませんでした。其附近に咲いてゐるシロバナエンレイサウなども多分同じ要領でいいでせう。

残念ながらもう余白が有りませんから今日は之で打切りますが、願はくば植物の撮影と同時に、其の生活をも観察して、自然界の一层津々たる興味に味到されん事を祈ります。(アサヒカメラ 昭和十二年五月号)

注 この文章には尾崎撮影の植物、カタクリ、ナガバノスミレサイシン、フデリンドウ、ワダソウが掲載されている。

## アルス文化叢書『雲』緒言

(昭和十七年五月刊)

詩人として詩業にいそしむ傍ら、雲を見、

雲を観察し、且つそれを撮影したり記録した公けにしても實にたゞ是だけである。

本書の眼目は写真と其のデータとにつて、文章の方は附録に過ぎないやうな物であるが、其の写真にしても、数百枚の中から撮影の日附と其後の天気との明らかな物を選び出したので、僅かに百枚に満たないといふ有様である。勿論見るに足る物のないのが主な理由であるが、一方、此等の必要な記録を欠いた

雲の写真是、本書を公けにする私の動機からいへば、さういふ物を加へることが結局無意味なことのやうに思はれたからである。笠雲や吊し雲其他で自作の無い物があつた。その為貴重な数枚を畏友武田久吉博士から押借した。茲に記して厚く感謝の意を表する次第である。

本書を手に取つた人が一人でも多く雲の美を今までよりもっとよく認めるやうになり、又更に一層細かく雲の美を発見し且つ味ひ、又雲によつて天気を予測するやうになればいい——さういふのが敢て此本を作る有力なる理

由であつた。それは「望氣の術」に長すると  
いふ以上に、実は今後いよいよ広く進ましく

豊かにならねばならぬ吾々の生活に、必ずや  
資する所があると秘かに確信してゐるからで  
ある。

それにしても、若し私にして現在の中央氣

象台長藤原咲平博士のあの「雲」を、世界にも無比独特と思はれるあの雲の図聚を知らなかつたならば、如何に雲が好きだったとはいへ、斯くまで深く雲の中に没入はしなかつたであらう。しかも私はさうする事が樂しかつたし、又次第に傾く齡の坂の道の上で、尚生きる限りを樂しいと思ふであらう。

更に又岡田武松博士の、あの廣汎にして深远な「氣象学」が無かつたならば、一般に氣象に關して、私としては今程の興味も知見も持ち得なかつたであらう。博士の「氣象学講話」と上下二巻の「氣象学」とは、其の全部を理解する事の出来ると出来ないと拘らず、實に私の眠られぬ夜の慰めの書の一つである。茲に両博士に対して心からなる御礼を申述べ、日頃の敬意を表さなくてはならない。

又前記の書物のほかに、中央氣象台技師三浦栄五郎氏の著「氣象觀測法講話」も此本の為には幾度か貴重な参考となつた。茲に改めて同氏に感謝する次第である。

更に今度の戦争以来急激に増した身辺公私多忙と生來の遅筆との為に、本書の原稿完成が予期以上に手間取つたにも拘らず寛容を示されたアルス社長北原鉄雄氏に、衷心からの謝意を表する。

昭和十七年三月十日陸軍記念日

編集部注『雲』の中の文章の一部は「尾崎喜八資料」5号に〈第二章 雲〉として掲載

### 珍らしい雲

本年五月二十四日午前八時空模様を見た時には、二十三日夜半から引続いての快晴で、僅かに南の方に一抹の巻積雲らしい物を認めのみでした。拙宅（杉並区）の二階からは雪白の富士山が明瞭に見られましたが、これは大抵終日快晴の時の特徴のやうに從来考へてゐます。新聞紙上の予報では「今日、今晚、西の風晴れたり曇つたり、事によると俄雨がある」といふ事でした。

それで二十四日午前十時少し前、二階の屋根の上へツアースの小型カメラを持つて攀ぢ登り、こんな快晴から俄雨になるやうな前兆が、少しでも空模様で判るとよいと思つて撮影に掛りました。

屋根に立つて西の方を見ると、なるほど西南西、つまり拙宅から眺めて富士の少し右手を輻射点として、巻雲乃至巻積雲と思はれる雲が、頭の真上だけを避けるやうにして、南北とに横たはつてゐました。上層での雲速は、見かけの上でも相当大きいやうに思はれました。私は先づ南の方の巻積雲らしいのを撮影しました。（写真①）

続いて北の方を写さうと思つて向きを変へた刹那、私は自分の眼を疑ふやうなものを見



写真① 昭和13年5月24日午前10時南南西の空

たのでした。

それは、前記の北方に横たはつてゐた巻積雲（或は巻雲）から噴き出して流れるやうにして、一本の、一層きらびやかに白い雲の紐があるで飛行機が描きながら残して行く煙幕のやうに、顕著な渦に見事な流線を画いて出てゐた事です。

実は私も一目見た瞬間には、本当に所沢か立川かの飛行機が煙幕の演習でもしてゐるのではないかと思つた位でしたが、恐らく七〇〇〇メートル以上は有るあんな高所で、そんな事は

ありやうは無いと思ひましたから（それに色々白でしたから）、兎に角時を移さず、直ぐ一枚写し、続いて尚一枚写しました。（写真2と3）

（紐状の雲の噴出点でシーツ状のCが波状を呈してゐるのが何だか心を惹きます）

③の時には、すでに其のプラチナのやうな、細く白い線が大分太くなつて、よく見ると粒々の組織を現してゐる事、多分写真で気がつかれるかも知れません。そして地になつてゐるCK（又はC）と一緒に東へ東へと動きながら、十分後には、此の煙幕状のものだけは跡

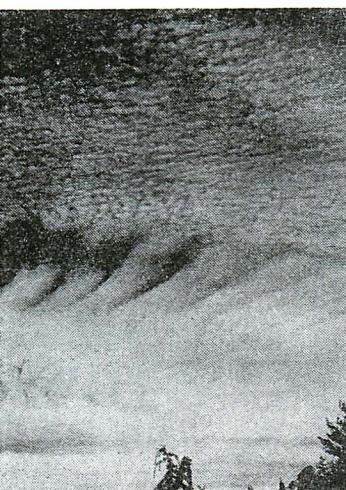


写真② 昭和13年5月24日午前10時1分北西の空（原文では写真3と上下セットになり、「上

昭和13年…」となつてゐる）



写真③ 同日午前10時3分北西の空（原文では写真2と上下セットになり、「下 同日…」となつてゐる）



写真④ 昭和13年5月24日午前10時10分南の空

形もなく消えてしましました。本当に夢のやうな大空でのドラマのやうな看物でした。  
写真④から⑦迄は其の後の上層雲の発展変化の状態であります。午前十時半に写した⑤から、そろそろ積雲が見え始めます。これは南の方から動いて来ました。  
以上で報告は終りますが、②と③の紐状の雲の成因のやうなものが判つたら嬉しいと思ひます。真に偶然に見る事が出来ただけに、その神秘的な美の感銘は、未だに頗る鮮明であります。

夕刊で、其の日前六時の天気図を見ると、

北海道南東海上にある七四四ミリ程度の低気圧から南西へ、本州島弧に沿つて伸びた主要な不連続線の他に、もう一本、東京の西方を通つてある不連続線が認められます。あの雲は、或はかうした時の上層不連続面に起つた局部的な異常によつて出来たのではないかとも考へますが、全くの素人の事で、さつぱり判りません。  
(附記 其日、撮影後十二時間で午後十一時頃雨が降り始めました。) (五月二十八日)

「天氣と氣候」昭和十三年九月号)

編集部注 この文章には時間の推移に従つて変化する雲の七枚の写真が時刻・方角のデータを付記して載せられている。そのうちの四枚は著書『雲』に納められているので、ここに掲げたが、あと三枚はネガ、プリントともないでの時刻と方角のデータのみを載せておく。「写真⑤ 同日午前10時30分南東の空」「⑥ 同日午前11時東の空」「⑦ 同日午

前11時西の空。後にこの記録をもとにし  
て著書『雲と草原』の中で、「雲を見る」2  
にエッセイとして文体を変えて収録されてい  
るが、「天気と気候」という専門誌に投稿し  
たのであろうか、それとも二枚の写真を送つ  
て報告・照会したという気象台から薦められ  
て寄稿したものか不明であるが、珍しいもの

なので採り上げた。文中のきらびやかな白い  
雲の紐は、現在飛行機雲と呼ばれているもの  
で、後にその説明回答とともに、おそらく飛  
行機雲を撮影した日本で最初の写真であろう  
との言葉を貰つたと言つて、本人はうれしそ  
うであった。

\*資料 2 \*

## 尾崎喜八と宮沢賢治

（編集部）

平成二年十月二十六日、尾崎喜八記念館の  
展示企画を進めるにあたり、富士見町教育委  
員会の人々と共に岩手県花巻市にある宮沢賢  
治記念館を見学に訪れた。その折、昔賢治が  
喜八を訪ねてこられた事があり、生憎喜八は  
留守で実子だけがお逢いした。その時賢治に  
チエロを短時間で習いたいのだが誰か先生を  
紹介して欲しいと頼まれ、当時親しくしてい  
た新交響楽団のトロンボーン奏者でチエロも  
弾かれる大津三郎氏を紹介した事があつた、  
と同記念館の小原氏にお話したところ、そ  
の事実を喜八が書いたものはないか、又実子  
の記憶をきかせて欲しいとお頼まれした。

帰宅後、喜八が賢治について書いたものを  
探し調べたが、新響のトロンボーン手に習つ  
た事は書いているが、そこにいたるいきさつ  
は書いてない。一方実子は「喜八の不在中に

岩手から賢治氏が訪ねて来られ、頼みに応じ  
て大津氏ならその望みを叶えてあげて下さる  
だらうと思って住所氏名を教え、尾崎家から  
聞いてきたとおっしゃるようにと言つてお帰  
しした」と覚えているが、その時期は定かで  
ない。しかし我が家ではこの事柄は私の幼い  
頃から言い伝えられてきており。これらを、喜  
八が賢治について書いたもののコピーと共に  
小原氏に送ろうと用意している時にふと思いつ  
いたのは、賢治の詩「永訣の朝」について

NHKの高校講座で喜八がゲストとして解説  
・朗読しているテーブルがあるということであ  
った。そこで早速今はカセットテープに収録  
してあるそれを聞いて見ると、その中で大津  
氏の名前は出してないが、そのいきさつを尾  
崎が語っている。

このような事の次第があつたので、今回7  
号に「賢治と尾崎」の項をもうける事にした。

雲の中へ刈つた草（宮沢賢治追悼）

種山が原の、雲の中へ刈つた草は、  
どこさが置いだが、忘れだ、雨ア降る。  
種山が原の、背高のすすき、あざみ、  
刈つて置ぎわすれで、濡れだ、濡れだ。

大にもあれ小にもあれ、彼が考案しました実  
行した多くの仕事、内外の衝動から彼自身の  
うちに継起せざるを得なかつたもろもろの課  
題に対する眞面目な着眼と、その個性的な独

「雲の中へ刈つた草」は詩文集『雲と草原』  
に、「賢治を憶う」は『夕べの旋律』に載つ  
てはいるが、高校講座「永訣の朝」と共に改  
めて読んでいただきたいと思うのである。  
尚、夢枕漠氏がその著書の中で、尾崎がチ  
エロを賢治に教えたようになるとられる表現をし  
ていられるが、これは当研究会会員で放送関  
係の収集整備をしていられる堀隆雄氏宅で夢  
枕氏が「永訣の朝」のカセットを聞き、書か  
れたもので、堀氏からは既に「あれは夢枕氏  
の感違いでし」と訂正が入つていて事を申し  
添えておく。

（尾崎栄子）

自の取扱い方、彼の抱いていた雲の中のものであるあの柔軟な夢想、北上山地の古期の地層をつらぬいて露出した橄欖岩や蛇紋岩の岩脈のような、あの珍貴な爽かな藝術の構成、時には川沿いの春の漠漠たる憂鬱と渾沌との奥で、まだ幼いモティーヴでしかなかつた未来の歌、常に問題の自己提出と設計と解決とにこもご多忙だった若い生活開拓者の日々、総じて郷里岩手県下における彼宮沢賢治君の生き方といふのは、確かに今日のような偏心的な社会情勢の大渦巻に巻きこまれながら僅かに一身を支えているわれわれが、出来ても出来なくてもとにかくそれをもつと大道的なもつと青天白日下的に自由自在なものにしなければならぬと突張る推進力と、そういう生活の未来にかけてのひとつの有力な資料、ひとつ暗示豊かな雛形であったことに間違はない。

彼の広範囲の読書とその非凡な解像力とは、眞に驚くべきものがあるが、さらに彼がその読書から得たなまの知識の岩漿を、彼自身の中心目的という硬い深成岩に接触変質させて、そこから全く新奇の用途に使われる貴重な材料や実地の用に供される壤土を産み出した創造力乃至实行力といふものは、彼が所謂「詩人」であっただけに、その着眼の高専的な点とともに一層大いに感嘆されなければならない。

彼は、できればこの世のあらゆる學問を一身に修めたいと思つてゐる人間の一人だつたに違ひない。その証拠は彼の書いたもの、彼

のした仕事の隨處にて、きれぎと光つてゐる。しかしそれは結局不可能な根数だ。そこで生活の中に瀰漫すべき平俗の叡智、民衆の手に奪還されて其處から一齊に開花すべき百科全書編纂者的な廣汎な知識、つまりそういう老ファウスト的乳糜が、未來の民衆生活のいきいきした新様式を打建てるための欠くべからざる要素として改めて強く要求されることになる。この要求はまさに当然であつて、少くともその限りにおいては格別ひどく先見的なものではないが、それにしても、これを単に筆舌の上の御題目に終らせず、まずできるところから実地はじめ、身をもつてその一部分たりとも実行し、とにかく農芸家であり詩人である人間として真にたつた一人、こんな背負いきれない草案の試みだけでも遣つたところに彼の偉大さがある。

多分もう四五年になると思うが、彼は上京中の或る夜東京の某管絃樂團のトロンボーン手をその自宅へ訪問した。海軍軍樂隊出のこの樂手は私の友人で、一方セロも弾き、詩が好きで、特に宮沢君の詩集「春と修羅」のあの男らしい北歐的な、極地的なリリズムを愛していた。その時の宮沢君の用件といふのが、至急簡単にセロの奏法の手ほどきと作曲法の初步とを教授してくれと云うのだった。しかしこれはひどくむずかしい註文で、ついに實現を見ず、やがて一日か二日で宮沢君は郷里へ帰つたのだが、その熱心さには、ワグナアのファンファーレを吹きまくつて息一つ弾ませないさすがのトロンボーン手さえ吐息を

のした仕事の隨處にて、きれぎと光つてゐる。

独学といふものには往々独善の香がして人間を貧寒な自尊の中へ曳きずりこむものだが、

彼の場合にはそれがいかにも非密教的で野外的で、自給自足の意味が大きくて広い。これは彼がその學問活用の目安を民衆の上に置いていたからである。彼はその精神の最も美しい高揚の中で叫んだ。「おお朋だちよ、いつしょに正しい力を併せ、われらのすべての田園と、われらのすべての生活を一つの巨きな第四次元の藝術に創りあげようではないか！」と。われわれの生活を第四次元の藝術にまで建築するということは、畢竟社會生活に亘りきれない草案の試みだけでも遣つたところに彼の偉大さがある。

その周囲の大人と子供、彼らに及ぼした宮沢君の感化といふものはかなりに深く大きいものであつたに違ひない。私は彼の獨學に毫末も私有財産蓄積的臭味の無いのを見て喜ぶとともに、彼の後進の間に益々独學の氣風の広く行き亘ることを祈つて止まない。

面積九百八十八方里、我が国第一の大県、奥羽中央分水山脈と北上山地とが東西に盤桓し、その間を北上川の本支流が縱谷横谷の深い鑿の刃で刻んだ彼の郷土。それは私に日本の北欧を想わせる。宮沢賢治君はあくまでその郷土と民衆との詩人だつた。「彼はそ

川と、その湖沼とを表現した」（ホイットマン）種山ガ原の草に寄せた彼の「牧歌」には、奥羽地方の古代民謡の豪壮な哀調が流れていながら、その上に夏の白雲の悠悠と浮かぶ早池峰の残丘を思わせるものがある。私は花巻の町も猿ガ石川も知らないが、彼の作詞作曲になる「イギリス海岸の歌」を口ずさめれば、北上地溝帯の荒廢たる河原を見る氣がする。詩人として彼は最もよくその郷土の眞実を歌つた。「民衆は彼らの詩人を通して知られ、理解されたがっている。もちろん眞実の系列の中で、詩的眞実こそは其の点最も有効なものに思われる」とジョルジ・デュアメルが云う。そして宮沢君を通して既に十分馴染になつた土地を訪れて其処の人々に会い、その山地や段丘をさまよい、雲の中に刈り忘れられた草を発見して彼の悌を偲びたいということは、今や私の念願となつてゐる。

（昭和九年一月 草野心平編『宮沢賢治追悼』『雲と草原』所収）

### 賢治を憶う

宮沢賢治生前の唯一の詩集『春と修羅』は、関東大震災の翌年の大正十三年（一九二四年）四月に発行されたが、それは奇しくも今連れ添つてゐる妻と私とが結婚して、その頃の東京府豊多摩郡上高井戸の田舎の新居に、家庭生活を営みはじめた同じ春のことだった。或る日幾つかの郵便物にまじって、その細

中の一軒家へ一冊の詩集が届けられた。差出人は遠い岩手県に住んでいる未知の人で、タンポポの模様を散らして染めた薄茶色の粗い布表紙の背に、「詩集 春と修羅 宮澤賢治作」とあつた。私もその頃第二詩集『高層雲の下』の原稿をまとめていたが、今と違つて知らない人から自著の寄贈をうけることなどは稀だったので、新婚早々の大らかな気分、世の中との新しい交わりや人の訪れを広々と迎えようとする気持も手つだつて、この未知の詩人からの贈り物を一つの大いなる祝福のように喜んだ。

時に宮沢賢治二十八歳、私は三十二歳だった。

花の散った玉川上水の桜の土手を眼前に、その奥の奥に薄青くかすんだ春の富士山を眺める家の前の花壇のテーブルで、私は遠い人から贈られたその詩集を一気に読んだ。すべてが今までの誰の詩とも違つていて。天文学や気象学、地理学や地質学、動物、植物、鉱物に、化学や物理学、仏教にキリスト教。種々さまざまな學問の専門術語や宗教上の言葉が、或いはルビを振られ、或いはなまの片仮名で、また或いは横倒しのローマ字綴りで、ほとんどどのページにも出現した。しかし幸いなことに私もそんな學問に全く無縁ではなかつたので、一つ一つの言葉の意味も大抵は

わかり、わからぬところは参考書で調べ上げて、彼がこうした専門語や術語を駆使せずにはいられない作詩上の要求を理解することことができた。それは当時一部の人々の非難したような術学でもなければ、奇異を衒うことでもなかつた。すべてがとめどもない彼の精気の突破口だつた。

賢治の内面の世界は光と混沌の夢の巢のような物を思わせる。さまざま欲望や夢想が精神的宇宙の流星雨のように飛びちがい、渦状星雲のようにすさまじく旋轉している。しかもそれらが次々に形をなして実行に移されるのである。

彼は十八歳で法華經の精神に生きることを誓う。彼は生涯を通じて農民を愛し、その幸福を念じ、農学と農芸の研究や指導に当たりながら、郷土の農民や子弟の間に新知識を普及し、おのれを空しくして彼らと共に土に働く。彼は講義に、設計に、実地指導に農村を巡回し、その超人的な奉仕活動と、極度の粗食と、重労働との間に徐々に肉体を虫ばまれながら、僅かな時間を見出して人の胸を打たずにはおかない詩を作る。彼は青年たちのためにレコードのコンサートを催し、また西洋から花や野菜の種子を取りよせて、これを町や村のために試植する。彼はただの詩人ではなかつた。われわれの言う「詩人」という名のスケールが、彼には小さすぎるようと思われる。

「雨ニモマケズ／風ニモマケズ／雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ／丈夫ナカラダヲモチ／慾ハナク／決シテ瞋ラズ／イツモシズカニワラツテキル。一日ニ玄米四合ト／味噌ト少シノ野

\*

菜ヲタベ／アラユルコトヲ／ジブンヲカンジ  
ヨウニ入レズニ／ヨクミキシワカリ／ソシ  
テワスレズ／野原ノ松ノ林ノ蔭ノ／小サナ萱  
ブキノ小屋ニキテ／東ニ病氣ノコドモアレ  
バ／行ッテ看病シテヤリ／西ニツカレタ母アレ  
バ／行ッテソノ稻ノ束ヲ負ヒ／(後略)

宮沢賢治の名を口にするほどの人は誰しもこの詩の存在を知り、少なくともその最初の一、二行をそらんじてゐるだろう。学校で生徒に教えながら、その人自身賢治に傾倒している先生は元より、まだ純真な魂が早くもこの詩の誠実な美に打たれて、何かしらけだかしい物に触れたような気持になる生徒ならば、喜んで、好んで、この詩の全体を暗誦するだろう。むしろ賢治を云々しながらこの詩をよく読みもせず、これによつて彼の真骨頂に思ひ至らない者、それは当代の詩人ではあるまいか。

いる。死も間近な妹は「あめゆじゅとてちてけんじや」(雨雪取つてきて下さい)と兄にせがむ。兄は外へ飛び出して欠けた茶椀に白い美しい雪をうけて帰つて来る。瀕死の妹が天上のアイスクリームのように喜んで舐めてくれるために。すると妹は言う。「うまれでくるたて／こんどはこたにわりやのごとばがりで／くるしまなよにうまれでくる」(また人間に生まれて来る時は、今度はこんなに自分の事ばかりで苦しまないようになつて生まれます)

なんというすなおさ、死に面してのなんと静かな清らかな光を包んだ言葉だろう。こういう方言をきわめて自然に配して読む者の心を浄化するこの詩こそ、正に兄と妹の天上の歌というほかはない。

(『小原流挿花』昭和四十三年一月号『タベの旋律』創文社刊に所収)

講師 こんばんは、宮沢賢治の『永訣の朝』こそは、私の知つてゐる幾つかの同じような悲歌の中で最も心を打たれ、胸に迫つて來るものである。それは美しいとも、清らかとも、けだかいとも、到底一言では形容のしようもない。血肉をわけた兄と妹、幼い時から互いに愛しいつくしんだ兄妹の現世での永の別れ。おりからみちのく十一月の寒い朝を陰惨な雲間からみぞれがびちょびちょ降つて

する妹のために書いた悲しみの詩『永訣の朝』賢治が二十五歳の若さでみまかつたその愛する妹のために書いた悲しみの詩『永訣の朝』

## NHK教育テレビ現代国語 「永訣の朝」

講師 こんばんは、宮沢賢治の『永訣の朝』第二回目です。前回は、生徒諸君と一緒にこの詩をおおざっぱに勉強してみました。まず、全体を四段に分けて、それから各段ごとの内容粗筋を理解しておいたわけです。復習してみましょう。第一段は、妹の死に臨んでの願いということでしたね。それから第一段は、その妹の願いをお兄さんが理解して、そして感謝をする。第三段は、その妹の健気な様子

尾崎 こんばんは。  
尾崎 そうでございますね。  
講師 今、宮沢賢治の『永訣の朝』の勉強をしているんですけども、宮沢賢治は先生の四つ年下でございますね。

尾崎 ありましたね。ちょうど私は旅行中で留守だったんです。その前に、この『春と修羅』をいただいて、宮沢さん、そのいらした用の中には、もう一つ私に逢う、私の顔を見ることと、もう一つは童話を書いていらっしゃつて、チエロ弾きゴーシュですか、そのチエ

に対するお兄さんの悲しみ、それから第四段は、私の祈りと願い、こういうことにまとめたわけです。今日はもう少し、その中身を深く見ていくと思うのですけれど、詩人の尾崎喜八さんに来ていただきました。尾崎先生は、明治二十五年東京にお生まれの詩人です。小さい時から読書、自然に親しみまして、二十歳前後に文学に打ち込もう、こう決心されたそうです。そして、この次に教科書で学ぶ「牛」という詩を書いた高村光太郎を大変尊敬なさいまして、また、「網走まで」の時に出てまいりましたが、雑誌の「白樺」にたびたび原稿をお寄せになつております。それから現在は、詩と自然と音楽を友として鎌倉にお住まいですが、現在まで詩集を約十五冊、翻訳を十数種類、それから隨筆、紀行文などを二十種くらいお出しになつております。先生どうもこんばんは。

口の弾き方ですか、それをまあ、簡単に教えてもらいたいと言つて。私はその時分、今までN H K 交響楽団ですが、その時分近衛秀磨さんがやつていた新交響楽団、そのチエロの人を知つておりましたので、その人に、その紹介してくれつて、してあげたらしいんです。家内が紹介してあげたんですね。そこでもつて二時間ぐらいそそくさとやつてもらって帰られたそうです。その時、高村さんの所に寄つたらしいんですよ。

講師 先生のお宅へ行つてからその後で。

尾崎 はあ。

講師 そうですか。

尾崎 高村さんはお会いになつたらしいですよ。

尾崎 私は、ついに会わない。

講師 そうですか。でも先生は、宮沢賢治の詩か、あるいは作品をいただいたようですが、尾崎 本をいただいてね、「春と修羅」をいただいた。あれは丁度十三年だったかな大正十三年、私が第二詩集を出した同じ年に出来て、随分感心しました。その時分、分かることはおりましたけどほとんど、分からなかつたんじゃないかと思うんですね。千部だそうですね。

講師 あの、個人のあるいは文学者の人がらといふのを、一言で言うといふのは大変危険なんですけれども、先生がご覧になつて宮沢賢治っていう人はどんな人なんでしょう。

尾崎 そうですね、今ならばね、すつかり分

化してしまつて、色々な事が、学問なら学問の中でもいくつにも分かれておりましょ。んですけど、その時分には、あの人人が総合的な人ですね、非常に珍しい、当時は珍しかった。今は又、今なりに珍しい人だと思いますね。

講師 宮沢賢治の写真があるんですけども。

尾崎 ようござしますね。私は、この写真大好きなんですが、賢治さんの写真って、割合と少ないんですけどもね。中でもこれはいい写真です。物を考えながら、苦しみながら、しかも又生き生きとしたものを内にこう躍動し、それで寂しい広い野原を歩いている。何を考えているんですか、色々な事が考えられますね。

講師 そうですね。それでは教科書の方の「永訣の朝」に移りたいと思うのですが、これは、宮沢賢治が二十七歳の時に妹さん、二つ年下でしたね。妹さんが死ぬ時に、こう作った詩でございますね。先生、この「永訣の朝」っていう詩そのものについては、ご感想いかがでございましょう。

尾崎 私は、宮沢さんの沢山の詩の中でも、あれはまた特別な一つの傑作だと思っていましたね。

講師 前回勉強しました時に、その、まず出てくる言葉ですね、方言があつたり、あるいは日常会話に使うような言葉が出て来たり、と思うと、科学的な用語が出て来たり、また

最後には、仏教用語でしようか、これが出て来たり、それから擬態語、擬声語、その擬声語が出て来たり、それから「詩」全体としては、その繰り返しの表現が非常に多いといふ、それで日常生活がある。ほんとに総合的な人ですね、非常に珍しい、当時は珍しかった。今は又、今なりに珍しい人だと思いますね。

講師 の、宮沢さんの詩集『春と修羅』ですね、これを見ると色々なものがござりますね。特に科学的な言葉が活躍するやつもござりますね。早池峰山へ登つたようなやつだと、そういうものもありますし、また、あの人は、土壤学、土ですね、それをやつたことがありますね。

講師 それはおそらくみんな使つたかたろうと思います。また、それに適切な詩を題材として選ばれたんですね。

講師 非常に豊富な、さつき先生がおつしやつた全人格的ないろんな方面に活躍している。それぞれの言葉をうまく、こう適切に使つてゐるわけですね。それでは先生、第一段の方から少し細かく説明していただきたいんですけども。教科書の百十三ページでござります。まず、一番最初に難しいのは、その「あめゆじゅとてちてけんじや」って、これ私なかなか読めないんですが、先生色々お調べいだいたいそうですけれども。

尾崎 いや、別に調べたというほどじゃあな

いんすけどね。

講師 どんな意味、あるいは、どんな効果を持つてあるんでしようか。

尾崎 効果って、これはなにしろ死ぬ際きわですね。の、言葉ですね。普通、わけいえば、雨まじりの雪ですね。それ「あめゆじゅ」と言うのだそうです。それを取つて来て下さいな。

あるいは、ちようだい……、ちようだいなしやないでしようね。もう死ぬ前ですからね。

死ぬ際ですから、「みぞれを取つて来て下さい」でしようね。その前に二行がございましょう。その間にガッコがしてある。これに大きな意味がありますね。最後の望みはこれなんです。それ持つて来てくれっていうんです。

詩のおしまいの方に、なお良くわかります。賢治さんはね、この言葉「あめゆじゅ」とてちてけんじゅ」っていうのを四つ入れていますね。だんだん少しづつ間を開けて長くなつて、これはあの人頭の中で、そのう、始終そこでもつて生きているんですね。そうすると必ずから、こう入れられずにはいられなくなつてくる。感想を言いながらこれが間に突然入ってくる。

講師 四回出て来る。その一回目と二回目、あるいは二回目と三回目とそれぞれ多少、こ

う意味が変わつてくるわけですね。尾崎 いよいよその意味がね、深くなつてくるわけですね。

講師 こういうふうに四回繰り返して使つた効果つていうのは、非常に妹の言葉を身にしみて、でも心の中で繰り返しているつていう

事になるわけでしようか。

尾崎 そこの所が分からないと、この繰り返しを四たびもやつた事が分からなくなつちゃうんです。ただ、真似をして書いたつてだめなんです。本当に兄さんの心の中で、哀れでしようがないんです。と、ここで自ずから出でるんです。

講師 そういうその妹の願いを聞いて、お兄さんは、その言葉を何度も繰り返しながら一番それが強く、こう出ているのは百十四ページの最初のころでござりますね。「わたしをいつしょあかるくするため」

尾崎 これは、賢治さんの、宮沢さんの主観ですね。と同時にこれは、事実なんです。

この妹さんの死によつて清められる。賢治さん的一生、これから一生。妹は死んでいく、私は生き残る。とにかく一生を明るくするために、あるいは今までの過去の今までの生涯をも同時に清めて明るくしてくれるために、ということなんでしょうね。

講師 はい。

尾崎 そうして、「こんなさつぱりした雪のひとわんを」と、こうなるんですね。するとね、一生明るくするためにね「こんなさつぱりした雪のひとわんを」と、このびちょびちょ沈んでくる、こいつとのコントラストですね。

こここの所がとてもよく生きているんですね。と思います。皆がここをだんだん清らかに神聖化されていきますね。

講師 それで、そういう世界に自分が高められて、それでその真ん中へんですけれども「銀河や太陽、気圏などとよばれたせかい」

こういうふうに高まつていくわけでしようか。

尾崎 これはただね、この岩手県の陸奥の暗い空ですね。蒼鉛色のそれこそ空。その空から落ちてくるだけじゃ舞台が小さくなる。と

すると、宮沢さんのそれこそ好きな銀河だの太陽とか、この気圏つてのは、宇宙圏ですね。非常に広い、大気圏じゃない、空気のある、あゝ、そんなものもないもつとあゝ、大氣なんかじやなくて宇宙ですね。銀河や太陽や宇宙などと呼ばれている世界の空から落ちてきたんです。この岩手の低い雨雲、雪雲の世界じゃない。こういうことなんですね。

講師 非常に大きな宇宙つていうものを描くことによつて、何を表現しようとするんでしょうか。

尾崎 これは、その、この厳肅なアトモスフェア、霧闇氣ですね、その時の。とにかく愛する二つ違ひの妹が、何と呼んでいたか知りませんが、今死んでいくんですよ。この世から去つていってしまう。その際ですね。この時はその空は、普通の空ではないでしよう。ねえ普通の雪ではないわけなんでしょうね。

「ふたきれのみかげせきざい」って、御影石のこの庭石か何かだろうと私は思っていますけれどもね。これらもそうなんです。ただの御影石の庭石なんかじゃないようになつてくる。それは先をお読みになつてみると分かると思います。皆がここをだんだん清らかに神聖化されていきますね。

講師 その表現が御影石材にも出でているんでですか？

尾崎 出て。自ずから入つてきますね。それ

がみぞれが寂しくたまつて「ふんい」は、あたりまえの現実ですね。しかしこのあたりは、これを読んでいると、ゆっくり読んでいると寒いような気がして、しかも清らかな感じがしてきましょ。このところは、非常に、おそらく一番大事な所じゃないかと私は思うんですよ。

講師 それに続いてすぐ、その「雪と水とのまつ白な二相系をたもち」

尾崎 それは、まあ、宮沢さんの一つの、やつぱり言いたいでしょ。何しろ、いつたまつ白な二相系をたもち」物質には三相あるっていうんでしょ。固相、固い、固相から氣相ね、空気にいたる。それから液相、液体の相、これはつまりここじゃ固相と液相でしょ。きっとね。「雪と水とのまつ白な二相系をたもち」この所はちょっと宮沢さんこう書きたかったんでしょうね。

講師 それで、その次につややかな松が出て来るんで、とつても……尾崎 この松の枝が、やつぱり自ずから普通の松の枝とは思えませんね。これは、多分この詩と同時にあと二つ一緒に出てきますけれども、松の枝のやつがありますがね。この松もやつぱり、この清らかさを出そうとしたんでしょ。

講師 何か色彩的にも今まで雪の話をずっとしてきて、松が出てきて、きれいですね。それで先生、その次のページにいきますと、あのローマ字が出て来るんです。これはどういふ意味つていいますか、効果つていいますか、あるんでしょうか。

尾崎 これはね、そうですね、これはあの「あめゆじゅ」だのが、あとの方の「うまれでくるたて」ってね、あれと同じ事なんですから別にローマ字で書かなくてもいいんでしょ。けどね。しかし、こりは大事な所なんですね、「Ora Orade Shitoru egumo」これですね、「Ora」は、私ですね。「私は私で死んでしまいますわ」っていうのでしょ。この言葉は、本当に最後のあれですねえ、本当に独り言ですね。兄さんに訴えているんだが知れないけど、それは最後の独り言でしょう。この項はね、あとの方は、むしろ願いだの訴えがありこそはやつぱり宮沢さんの心に最も染みたやつじゃないんでしょ。その、みぞれのきれいな雪、冷たい雪が落ちてきてくれといふことよりも、もっとあれでしょ。兄さんとしては、身に染みる言葉でしょ。しかも、これね、仮名で「おら、おら」って言つたらね、「おら」なんて女が言うかと思う。……そつかるとやはり「私は」ですかね。

講師 この願いが、今先生がおっしゃったそのページの最後の三行、ここに集まってくるわけなんですね。ここは結局妹の……どういう事なんでしょうね。

尾崎 これはもう、遺言と言つてもいいか、最後の祈りと言つていいか、願ひって言つていいかね。

講師 今まで周りの人々に随分迷惑をかけてきました。

尾崎 これはね、そうですね、これはあの苦しんでいた、今度は次の世にもしも生まれて来る事が出来るならば、そうした自分の事ばかりでなく、人の事でもなお苦しめるように。

講師 それで、その次の最後の段階にいきままで、一回目の話し合いでは、なかなか難しかつたんですけども。まず、その「兜率の天の食」でござりますね。これはどういうことなんでしょうか。

尾崎 「兜率の天」って言うのは、私も後で調べたんですけども、兜率天、六つの天があるんだそうです。仏教の世界にはね。これは第四番目の天。天って言うか、国でしょ。ね。あれは、弥勒菩薩がね、これを治めてるんだそうです。それでお釈迦様の救いが、うまくその救いを受けられなかつたその衆生をね。そこで弥勒菩薩が教えてやつた。仏の道をね。本当の人間の道をですね。それを教えてやつた。それが兜率天と言うんだそうです。これは、前には、初めには「天上のアイスクリーム」を使ってありましたね。私はね、必ずしもそれは悪くないと思うんですけど。アイスクリームがいけないならば、氷菓、氷の果物ですか、菓子ですか、「天上の氷菓」に変わつてもいいと思うんだけれども、やっぱりここは、こういうふうにしたかつたんでしょうね。ただし、高等学校の一年生の方には難しいですね。しかし、こりでもつて、(七字分不詳) 出したでしょ。それで聖い糧

をもたらす事になりますね。

講師 妹の願いの言葉の意味が、兄に良く分かつて、それでここ所が、その宮沢賢治としては一番言いたかった中心部分と見てよろしいでしょうか。

尾崎 ま、私はそうだと思いますね。しかし、

いつたい、この前がずっととなくては、いきなりこれじゃだめなんですね。これ書きながらね、本人書きながら段々、これは深く入つていったんでしようね。自分の仏教のね。こ

で生がされてきたんだと私は思うんです。講師 あの「詩」全体のまとめということになりますと、まずその兄が、妹の死を悼んで作つたという詩は、非常に珍しいわけですね。

尾崎 そうですね。妹さんは珍しいですね。弟さんはまだありますが、あるいは兄さんはのはありますね。「エレジー」なんかですね。これ本当に珍しいですね。しかし、本当にありますね。宮沢さんのとし子さんが、ああいう美しい人だったし、いい兄弟だったでしょ、うね。

講師 それから、妹が死んでいくっていう暗い事実に対して、逆に周りが、こう高められていて。

尾崎 高められて、清められて、空気がすっかり清浄にされて、これならば愛せられたものが愛してくれているもののそばで死んでもいいな。って気にならないともかぎらない……。

講師 先生それでは、「兜率の天の食」の所が初版本ではアイスクリームうんぬんという

ことでございましたね。先生初版本をお持ち下さったようで。

尾崎 これは、私が壊したものじゃないんですけどね。壊れやすく出来ているんですよから。

講師 これは、先生が第二番目の詩集をお出しになった時に……。

尾崎 丁度私が第二詩集を出した時と同じ年。

講師 何か、自費出版で……。

尾崎 自費出版で、大変ですね。

講師 千部ですか。

尾崎 千部。本当に売れたのはね、本当にごく少ない部数らしくうございましてね。今じや大変ですね。

講師 これは先生、宮沢賢治が先生の所に：

尾崎 私、人に貸したら「お借し下され」になっちゃったんですね。そうしたら、これは昭和九年にね、賢治さんの追悼会がありましてね、東京で、いく人かの友達が集まつた時に弟の清六さんが持つて来て下さつたんです。

それでやっぱり初版の残つていたやつを。だからこれ大事にしているのです。この所の詩集つて書いてあるでしょう。ここをね、何か

銅の粉か何かで一生懸命消したそうです。詩集つていう事を言うのが嫌だつたらしいです。

心象スケッチ「モディファイド」って言うやつですね。「心象スケッチ」って言ってらし

たらしいんです。どうもここを消したそうですね。私は消してありませんがね。

講師 そうですか。教科書に出ているのとは

初版本ですから多少内容も違うと思うんですが、先生おそれりますけれども、朗読をお

聞かせねがえないでしよううか。

尾崎 私がやるんですか。

講師 はい。

尾崎 困りましたね。

講師 是非一つお願ひ致します。

尾崎 私もこの方言じゃね、迷っていますけど。じゃあ、読んでみましょ。

尾崎 永訣の朝

きょうのうちに

とおくへいつてしまふわたくしのいもうとよみぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

(あめゆじゅとてちてけんじや)

うすあかくいつそう陰惨な雲から

みぞれはびちよぶつてくる

(あめゆじゅとてちてけんじや)

青い蓴菜のもようのついた

これらふたつのかけた陶碗に

おまえがたべるあめゆきをとろうとして

わたくしはまがつたてつぼうだまのように

このくらいみぞれのなかに飛びだした

(あめゆじゅとてちてけんじや)

死ぬといういまごろになつて

わたくしをいつしょあかるくするために

こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまえはわたくしにたのんだの

ありがとうわたくしのけなげないもうとよ

わたくしもまつすぐにするんでいくから

(あめゆじとてやてけんじや)

はげしいはげしい熱やあえぎのあいだから  
おまえはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽、気圧などとよばれたせかいの

そらからおちた雪のさいのひとわんを……

…あたきれのみかけせきわいに

みぞれはさびしくたまつていて

わたくしはそのうえにあぶなくたち

雪と水とのまつしろな二相系をたもち

すあとおるつめたい零にみちた

このつややかな松のえだから

わたくしのやさしいもうとの

さいのたべものをもらつてしまふ

わたくしたちがいっしょにそだつてきただいだ

みなれたらちやわんのこの藍のもようにも

もうぎょうおまえはわかれてしまふ

(Ora Orade Shitori egumo)  
ほんじゅくわむねおまえはわかれてしまふ  
あああのゝおされた病室の

くらいびょうぶやかやのなかに  
やわしくあおじろく燃えている  
わたくしのけなげないもうとよ  
この雪はどう見えるばうにも

あんまりじこもまつしろなのだ  
あんなおそろしいみだれたそらから  
このうつくしい雪がきたのだ

(うまれでくるたて)  
こんどはこだわりやのじとばかりで  
くるしまなあようにうまれてくる)  
おまえがたぐるこのあたわんのゆきだ  
わたくしひまむじからしのる

どうかこれが兜率の天の食に変わって  
やがてはおまえとみんなとに聖い糧をもたら  
すことを  
わたくしのすべてのさうわいをかけてねがう

（講師）どうもありがとうございました。

（尾崎）いい詩ですね。立派な詩です。

（講師）今まで文字づらを追つて、随分何度も

勉強してきたんですけども、先生の朗読一

度うかがうだけの方がはるかに、こう内容が

良く分かりますね。詩とはやっぱりこの朗読

が非常に大切なものなんでしょうね。

（尾崎）そうですね。やっぱり、本当にその詩

の心を本当につかまなければだめなんですね。

ですからそう言つてわるい場合もあるかも知

れないけれど、朗読することを仕事にしてい

る人が、もとと本当に詩を学ばなくては、詩

の心をつかむ事を学ばなくてはいけないと私は

思います。

（講師）生徒なんかが、こう、詩を読んでみて一度読んだだけでは、なかなか分からない、そういう時には朗読しかやつた方がよろしいでしようか。

（尾崎）はあ。読んだ方がよいうれしますね。  
（講師）わからないままに……。

（尾崎）そう、わからないままに。それは、私は

は良いと思います。

（講師）それで、いう讀んでいるとだんだん自然に分かつてくるものでしようね。

（尾崎）歌にしたってそうですね。

（講師）はい。非常にいう、あの、すっかりも

う細かい意味の説明なんかやらないで、あの先生の朗読ですっかり良く分かりまして、本当にもう。で、この、あの、他の詩の場合なんかもそうでしょうね。生徒が勉強する場合には。

（尾崎）そりやそうですよ。どれもね。だから勇ましいものは、やっぱり勇ましいようになりますよ。しかし、この詩は難しいですね。

（講師）難しい詩ですね。なかなかあの……。

（尾崎）先生最後なんですけれども、あの先生ずっと長い間詩をお作りになつてまして、その、高校生が詩を書くっていう事はどうでしょう。

（尾崎）いや、ちつとも悪くはありませんね。

（講師）うんと、どんどん気軽に、こう書いた方が……。

（尾崎）気軽に、いうのはわかりませんけれどもね。書きたい、書きたくて、たまらなくなつたら書くことですね。これが一番大事な

ことですね。あんまり詩を書くことを軽く考

えちゃいけませんね。やっぱり自分はね、困

難なものにぶつかっているんだと、しかし、

これは書かずにはいられないという言葉が出

たならば、一行でも、二行でも三行でもいい

から書きなさい。私は孫だの、あるいはその

友達には、やっぱりそう言つてはいるんですね。

（講師）どうも先生、あの難しい詩だったんで

すけれども、どうもありがとうございます。

（尾崎）皆さんもそれじゃ今の話をもとにしてもう一度自分で朗読してみて下さい。それではさ

〔NHK教育テレビ高校講座現代国語〕昭和四十五年八月三日放送。於尾崎家テープレコードに収録。テープ起し、会員石田二三夫氏）注 傍点は強調した音声の箇所についた。

### 尾崎喜八書誌—初出目録・補遺(一)

嘉納忠明

### 新聞・雑誌掲載目録・補遺

「消息」	動物文学	S 10・5
「雪消の頃」	大阪朝日新聞	S 12・3・19
「五月の太陽」	読後感 綴方教室	S 13・8
「初夏の工場から」	(詩) 日本女性	S 17・6
「我等の登山」	日本女性	S 17・7
「大詔奉戴」	(詩) 文化日本	S 17・7
「詩句の解釈と朗説について」	文化日本	S
「海國に生きる」	(詩) 日本女性	S 17・8
「農村新年」	(詩) 同盟グラフ	S 18・1
「職場の文芸・選評」	ちから	S 20・4・11
「氷の下の歌」	山火	S 29・3
「こじかものがたり」	(童話詩)	こどもクラブ
S 32・7		
「野鳥閑談—尾崎喜八氏に聞く」	東京新聞	
S 35・5・15	夕	
「電話寸感」	ダイヤル	S 42・3
「鎌倉春信」	(時事通信社)	S 42・3) ※
「別れの曲」	をかなでる木の手箱	朝日新
聞 S 42・4・11	タ	

※本文は先に「日本読書新聞」に掲載されているが、便宜上ここにも入れた。

※時事通信社や共同通信社から原稿依頼されたものは、その通信社の刊行図書以外は、普通地方新聞社へ配信される。しかし、掲載は地方新聞社の都合であり、しかも地方新聞社は多数であるため、掲載紙はつかみがたい。

### 雲とクラドニ図形

石黒 敦彦

「解説」 尾崎喜八編『千家元暦詩集』 S 28  
11・30 新潮文庫

「最後の本を前にして」 高村光太郎『アトリエにて』 S 31・6・30 新潮社

「解説」 高村光太郎訳『ロダンの言葉』 S 34・8・10 平凡社

「編纂者の後記」 尾崎喜八編『世界の詩3・高村光太郎詩集』 S 38・7・20 弥生書房

「千家さんの全集について」『千家元暦全集・下』 S 40・10・20 弥生書房※

「無上の喜び」 北川太一編『高村光太郎全詩稿』 内容見本 S 42・10・30 二玄社

「人と作品」『日本詩人全集12・千家元暦』

（尾崎喜八編） S 44・1・20 新潮社

「解説」『同 右』（尾崎喜八編） S 44・1・20 新潮社

「『ぱらぱらな駄鳥』について」 北川太一編  
『高村光太郎詩集』 S 44・3・1 旺文社文庫  
「『ペートーヴェンの生涯』に寄せて」 ロマン・ロラン、蜷川譲訳『ペートーヴェンの生涯』 S 44・4 旺文社文庫

喜八は雲を深く愛し、詩やエッセイのみならず、今号で紹介したような写真をともなった自然科学的な観察記録まで書いている。この愛は晩年にも変わることなく、最後の著書となつたエッセイ集『音楽への愛と感謝』（新潮社刊）の中では次のように描かれている。  
それにつけても思い出すのは、或る日長与さんの家から帰つてゆく志賀直哉さんを溜池のほうまで送りながら、福吉町の坂の途中で、青空に刷毛で刷いたような細い白い巻雲の浮かんでいるのを見て思わず「きれいですね」と志賀さんに言つたところ、「雲のどこがそんなにおもしろいの、君」と手打ちを食わすように問い合わせ返されて、咄嗟の返事にまごついたり、内心憤慨したりしたことである。私は小さい時から雲が好きだったし、その後も多少雲についての勉強もしていた。雲などという物はこの先輩や「白樺」の人たちにとっては至つて興味のない主題かも知れないが、私にとっては知的好奇心の対象であり、さらには詩でもあれば音楽でもあった。しかし文学の世界での新参者である私には、この尊敬する先輩に向つて「芸術家が雲の美に感動してはいけないのであるが、志賀さん」と反問することはできなかつた。（白樺とベルリオーザ）より

喜八が雲について、詩でもあれば音楽でもある、いやそれ以上の、彼岸と此岸をつなぐ何ものかの面影をすら認めていたことは、今後研究が進むにつれて明らかにされることと思う。遺族の一人としての私は、そうした研究の現れるのを心待ちにする者であるが、同時に、現在の私の仕事との関連からもぜひ、注記したい事柄があり、あえて筆を執らせていただいた。

喜八は詩集『花咲ける孤独』(一九五五)の「巻積雲」において、秋の高原の空の彼方に浮かぶ「真珠の粒を撒いたようなひとつなりの巻積雲」から得た、一つの美しいインスピレーションを描いている。

その昔、階段になつた教室で、音の事をならう物理の時間に、クラドニの音響图形の実験を見た。薄い金属の板のへりをヴァイオリンの弓でこすつて見せる先生の、その薄給の服の痛みが私の心を痛ましめた。だが指先の支点を変えるたびに、さまざまに変化する砂絵の模様をなんと先生が美しい微笑で示したことか！

今あの空につらつらとならぶ巻積雲が少年の日のクラドニ图形を思い出させ、遠い昔の先生の、おそらくはもう此の世で再び見るよしもないあの笑顔や素朴な姿をなつかしませる。

ここでは、死者への愛の追憶によって、二つの異なる自然現象が強く結び付けられている。巻積雲の規則的に見える見事な形は、地上の暖かい空気と、上層の冷気の間に起こる熱対流によって形づくられるもので、物理学ではベナール対流と呼ばれている現象である。一方、そこから詩人の連想がおもむいたクラドニ图形とは、良質の石英砂を上に撒いた鋼板を棒でこすつたり、裏面にスピーカーを密着させて音を流すと得られる、シンメトリカルな砂絵の紋様のことである。両者の形は、たしかに一見似ている。しかし雲の生起する仕組みについて人一倍詳しかった詩人は決してそれらを単に外面上の類似から安易に混同したのではなく、両者の相違を知りつくした上で、あえてこのように書かずにはいられないかったのではないか。この号の「雲」に関する文章の水準はそうした推測の裏付けともなりうるということを注記したかった。

私は現在、自然現象の実験を通して新たな「芸術体験」を生み出そうと試みる新しい芸術の動向にたずさわっている。そしてそうした仕事を通して、クラドニ图形やベナール対流が、芸術家や科学者、哲学者によつていかに注目されてきた現象であるかを痛感させられることが多い。前者は、物理学者クラドニによって発見されて以来、クレー、カンディンスキーラの画家や、波動学者イエニィらによって、根源現象として重視されてきた。シタイン（アーヴィング）は響きによって形づくられる形態の中に「原言語」のヴィジョンすら見ている。

一方、後者は、化学者プリゴジンによって、生命と無機物の間隙を埋める重要な現象として採りあげられている。しかし喜八は、「巻積雲」を通して、この「熱」と「響き」という異なる原理から生起した現象を、死者への愛の追憶によって結びつけ、より大きな宇宙の営みのあらわれとして統合しようとした。それゆえ、この詩は、「自然現象と芸術」の関連を考える上からも、きわめて重要な位置にあると確信している。なお余談ながら、私は自身もクラドニ图形を研究しているために、八六年頃、日本の近代詩、現代詩の中でこの現象のことを詠つたものをしきりに探したことがあった。しかしまず物理現象を詩の言葉で適確に詠つたもの自体がとぼしく、「響き」を詠つたものはあっても、クラドニ图形に取材したものなど皆無であり、がっかりしたことがある。そうした意味でも、これは貴重な詩であると思う。

## 尾崎喜八記念館計画の進行状況について——2

石黒 敦彦

第六号でお知らせしました記念館建設の計画の、その後の進行具合についてお知らせします。九〇年度の目立った進展としては、ようやく町から構想の全体像が呈示されたこと、それに対応して、私たちの側で展示企画のための準備態勢を組み始めたことがあります。以下にその経過を、日録風に記していくま

七月に富士見町教育委員会から略式文章で、展示案の企画を遺族に委託したい旨の申し出がありました。これを受けて尾崎家では関係各位と相談した結果、「尾崎喜八研究会として委託を受ける」旨の返答をいたしました。

なおこの時点で、教育委員会から、九〇年度の調査費として百万円を町に申請してあるこ

とを聞きました。

九月十二日には、伊藤和明、尾崎栄子、石黒敦彦が富士見を訪れ、教育長、教育次長、係長と会談。この時点で初めて構想の全体像が呈示されました。九三年度内に二階建ての町立の総合文化会館（名称未定）を建設し、その中に、公民館、図書館、町史資料室、「富士見に滞在した文化人」記念室とともに尾崎記念室を作ること。場所は二階の約半分にあたる面積三八四平方メートル。建設地は富士見駅の北側、市民センターの隣の空き地が予定されていることなどを聞き、総合館の構想の見取り図を渡されました。

この七・九月の経過を踏まえ、尾崎実子は、この企画と関連の深い分野で仕事をされている十二人の方に、記念館の展示企画を実現するまでに生じるさまざまな仕事をしていただきたい旨をお願いしました。そしてこの方々を尾崎喜八記念館展示企画委員とし、さらに教育委員会からの要望もあり、これに遺族三名が加わりました。

十月十一日には、この企画委員と教育委員会の顔あわせを含めた第一回企画委員会を東京で開催。富士見からは教育長、次長が出席

し、これまでの経過を委員に対しても説明してもらいました。これに対して、各委員から質疑、希望などが出されました。この時、「少なくとも喜八の展示に関しては『記念室』ではなく『記念館』という名称を探るべきだ」という強い意見が続出しました。ビルの中の一室でも「記念館」などの名称を探るケースは過去多く見られましたし、喜八と富士見のかかわりの深さからしても、この要望は当然だと思います。

企画委員は、以後、分科会を開いて企画案を検討し、写真や展示資料の整備にとりかかること、年に何回かは総合的な企画委員会を開いて進行を確認すること、その際は教育委員会も出席することなどを確認しました。また、十一月中には企画の九一年度予算案を提出してほしいと依頼されました（教委は予算を二年に分けてしたい旨）。

この後、十月二十六日には、企画委員、教育委員会の有志が宮沢賢治記念館を見学。詩人であり自然科学にも通じていた賢治の全体像をどう展示してあるかを勉強し、参考にしようという。他にも、伊藤氏が名誉館長の伊豆大島火山博物館をはじめ、富士見近隣の茅野、原村の博物館、白樺美術館、諏訪図書館の藤原咲平・新田次郎の展示コーナーなどを見学したりしています。今後、各セクションの準備が盛んになるにつれて、企画、資料面で会員諸氏のお力を借りしに伺うことが多くなると思いますが、その節はよろしくお願い申しあげます。

- 平成二年に出版された書籍で、尾崎のことについて書かれたものが含まれている本を紹介する。

『信濃路の「詩碑』』矢島幸雄著 銀河書房  
美ヶ原・上高地・松本・安曇野・富士見の五つの碑について詳細に書かれている。二〇〇円  
『蕗子句抄』朝比奈菊雄著 茗溪堂 朝比奈氏は昭和三十年代富士見高原療養所に入院中分水荘に住む尾崎を訪ねられ、その後何人の同好の士を誘ってはしばしば訪れて、尾崎との深い親交を結ばれた方である。その常連の八名の集りに尾崎は芭蕉が諏訪地方を詠んだといわれる句からとつて穂屋野会と名付け、夫々が快癒退院されてからも毎年、亡くなる前年まで尾崎の誕生日には全員で、尾崎家に集つて旧交を暖めていた。『蕗子句抄』の中に収められた写真の中の三枚は、当時の尾崎の姿が偲ばれる懐かしいものである。三〇〇円

● 現在歌われている男声合唱曲のご紹介をする。作曲はすべて多田武彦氏である。  
「尾崎喜八の詩から・第一」冬野・最後の雪  
に・春愁・天上沢・牧場・かけす 関西学院グリークラブ委嘱曲、昭和五十年作曲合唱名曲コレクション27「尾崎喜八の詩から」東芝CZ 28-9100として販売中。

## 研究会だより

尾崎栄子

「尾崎喜八の詩から・第一」雪消の頃・郷愁  
・盛夏の午後・田舎のモーツァルト・夕暮の歌・野辺山ノ原 神奈川大学フロイデコール

ソラニ曲、昭和六十一年作曲

「男声合唱組曲『桜の樹の歌』」春の牧場・金峰  
山の思い出・故地の花・音楽的な夜・桜の樹  
の歌 メンネルコール広友会委嘱曲、平成元  
年作曲。二と三の曲はCD化されていない。

●校歌の資料を尾崎家に提供された、石川翠、  
細川文惠、堀内彦男各氏に感謝申し上げる。

左記の方々のご冥福をお祈りする。

鳥見迅彦氏 尾崎が生前、詩人の中では特に親しくしていた方であった。雑誌「歴程」「アルプ」でその文跡に親しまれた方も多いことと思う。御荷鉢文学碑の集りで西御荷鉢山頂に立たれ、奥秩父の山々を目を細めて眺められたお姿が思い起される。主著『けものみち』『なだれみち』

加藤末彦氏 前述の穂屋野会の一員で、若き日、療養所から三つの沢を渡つて足繁く分水荘を訪れた方である。三年前に自らの死後散逸しては申しわけないからと言つて、尾崎に貰つた半折の「懸巣」を始め色々紙十枚を尾崎家にお返し下さったので、その中の「懸巣」を加藤氏の賛同を得て石版刷りで復刻、会員の中で希望される方々にお届けしたことはご記憶に新しいと思う。

丸山好氏 群馬県万場永友会の一員で、昭和五十五年、他の九名の方達と共に西御荷鉢山中に尾崎の文学碑を建てて下さった方である。そのお名前がこしえに刻まれた文学碑は、白樺・朴・小楓の林の中に建つて、子供の頃から親しまれた西御荷鉢の山頂を見つめている事であろう。

功力由一氏 富士見詩碑建立に多大の尽力

をされた富士見尾崎会の長老で、尾崎は富士見在住時代から渝らぬ交誼を結んでいた

## ハの一年のやうじと

平成二年二月三日、生前親交のあった方々によつて、蠟梅忌第十六回が東京青山の「青山荘」で行われた。司会＝伊藤和明氏、お話＝川崎精雄氏の「山岳文学のひとつ」の逸話にかかる當時のエピソード。昭和三十六年七月放送の「夏の夜の思い出」の録音をさきながら、取材のため尾崎に同行された伊藤和明氏の信州梓山の話があつた。メンネルコール広友会代表伊藤俊明氏による、男声合唱を通じて知つた尾崎喜八についての話。石黒敦彦により記念館設立の進行状況報告。参加者八十六名。

六月一日～三日、信州川上村梓山白木屋旅館に於て「みずならの会」開催、野鳥・植物を観察しながら尾崎の愛した梓山周辺を歩き、夜は昭和十一年、三十六年と二回にわたつて親切にもてなしてくれた宿のおかみさんも交えて、当時の同行者伊藤和明氏のお話、写真家で「アルプ」の編集者の一員であった三宅修氏のお話をきく。参加者延五十三名。

■「尾崎喜八先生と校歌」を執筆された名取正義氏は、富士見在住。元教員で、現在は家庭電機器販売業を営んでおられます。喜八が富士見時代に知り合つた町の青年の一人です。二号以来掲載しております喜八の文章は、そのほとんどが嘉納忠明氏の探索によるものです。「初出目録」とある、氏のたゆまぬ研究に、改めて感謝したいと思います。

■次号は、喜八の生誕百年記念の特別号として、新しい試みをするべく企画中です。乞御期待。（九〇年十一月十日 石黒敦彦・記）

## 編集室から

「富士見に生きたい」碑の碑前の集いが富士見尾崎会によつて開催、教育委員長加々見一郎氏の挨拶につづき、長年にわたり尾崎作詞による校歌の調査をして来られた富士見在住名取正義氏により、調査研究の発表、取材中に出合つた様々の感動の話が披露された。高原中学校生徒による尾崎補修の校歌、広友会全員による「かけす」の献歌があつた。参加者約百八十名。

八月二十五日、富士見音楽愛好会主催による男声合唱が富士見グリーンカルチャーセンターに於て行われ、出演メンネルコール広友会、尾崎喜八の詩による男声合唱組曲『桜の樹の歌』（多田武彦作曲）が披露された。

八月二十六日、長野県諏訪郡富士見町にて、

尾崎喜八資料・第七号

一九九一年二月四日発行・非売品

ISSN 0911-3339

発行・尾崎喜八研究会

鎌倉市山ノ内一九七一五一(二)  
電話〇四六七(一一一)一七六一

振替 横浜7-33012尾崎喜八研究会  
印刷・住友出版印刷